

# 友田町遺跡 第2・3次発掘調査概報

— 店舗建築に伴う調査 —

1998

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

## 序 文

和歌山県の北西端に位置する和歌山市は、市域のほぼ中央を西流して紀伊水道に注ぐ紀ノ川によって形成された肥沃な和歌山平野を中心とした地域であります。この和歌山市には、原始の時代より人々が住み着き、著名な遺跡が数多く存在するところでもあります。特に、全国的にも著名である岩橋千塚古墳群や大谷古墳をはじめとし、400カ所以上にもものぼる遺跡が確認されています。

今回の調査地は平成6年度に新しく発見された友田町遺跡であります。この遺跡は市域の中心部としては最も海岸に近いところに存在した古墳時代の集落とみられ、検出した多数の遺構から周辺にはまだ多くの遺構が残されていることが明らかとなりました。今回の調査では古墳時代全般を通じた集落の一端を明らかにし、重要な調査成果を得ることができました。

ここに報告する調査概要が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成10年3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団  
理事長 木 下 正 昭

## 例 言

1. 本書は、株式会社ゴトウ本店が和歌山市友田町四丁目40番地に計画した店舗建築に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、株式会社ゴトウ本店の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、実施したものである。第2次調査は対象面積200㎡を約2ヶ月間の期間で、第3次調査は対象面積200㎡を約2ヶ月間の期間で実施した。
3. 発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

| 和歌山市教育委員会 |      | 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 |                   |
|-----------|------|-------------------|-------------------|
| 教育長       | 坂口全彦 | 理事長               | 木下正昭              |
| 文化振興課長    | 志岐忠一 | 事務局長              | 竹尻圭吾              |
| 文化財班長     | 小松増甫 | 総務課長              | 別院 稔              |
| 学芸員       | 前田敬彦 | 事務員               | 奥野勝啓（調査庶務担当）      |
|           |      | 学芸員               | 井馬好英（第2・3次発掘調査担当） |
|           |      | 学芸員               | 吉田綾子（第2次発掘調査担当）   |
4. 本概報掲載の遺跡・遺構写真撮影は井馬が、また遺物写真撮影は井馬・高橋方紀が行った。
5. 本書の執筆は発掘調査担当の井馬、吉田のほか、同財団学芸員北野隆亮・高橋が分担し、編集は井馬が行った。各執筆分担については以下の目次のとおりである。
6. 写真図版の遺物に付した数字番号は、実測図番号に対応する。
7. 概要報告書の作成にあたり、多くの方々に現地及び遺物整理作業時に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。

# 本文目次

|                            |        |    |
|----------------------------|--------|----|
| 1. 調査の契機と経過                | (井馬好英) | 1  |
| 2. 位置と環境                   | (井馬)   | 2  |
| 3. 調査の方法と経過                | (井馬)   | 4  |
| (1) 調査の方法                  |        |    |
| (2) 調査の概要                  |        |    |
| 4. 遺構                      | (井馬)   | 6  |
| (1) 第2次調査                  |        |    |
| (2) 第3次調査                  |        |    |
| 5. 遺物                      |        | 14 |
| (1) 弥生時代の遺物                | (井馬)   | 15 |
| (2) 古墳時代の遺物                |        |    |
| [遺構出土の遺物]                  | (井馬)   | 15 |
| [包含層出土の遺物]                 | (吉田綾子) | 20 |
| (3) 奈良時代から鎌倉時代の遺物          | (北野隆亮) | 21 |
| (4) 製塩土器                   | (北野)   | 21 |
| (5) 土製品                    | (高橋方紀) | 22 |
| (6) 石製品                    | (井馬)   | 22 |
| (7) 石器                     | (高橋)   | 23 |
| 6. まとめ                     | (井馬)   | 24 |
| (1) 友田町遺跡における古墳時代遺構の変遷について |        |    |
| (2) 掘立柱建物群について             |        |    |
| (3) 友田町遺跡出土の祭祀関係遺物について     |        |    |
| 報告書抄録                      |        | 28 |

# 図版目次

- 図版1 調査地遠景空撮（東から）、調査前の状況（西から）
- 図版2 A区全景（東から）、A区全景（西から）
- 図版3 A区SD-1（南東から）、A区SD-1土層堆積状況（北西から）
- 図版4 A区SD-6・7・20周辺（東から）、A区SD-7・20土層堆積状況（南東から）
- 図版5 B区全景（東から）、B区全景（西から）
- 図版6 B区SK-2（南から）、B区SK-2遺物出土状況（上が北）
- 図版7 B区SD-6・7・20周辺（西から）、B区SD-6・7・20（北西から）
- 図版8 B区SA-1（北西から）、B区西壁土層堆積状況及び噴砂検出状況（東から）
- 図版9 C区全景（東から）、C区SB-1（西から）
- 図版10 C区SD-2（南東から）、C区SD-2土層堆積状況（北西から）
- 図版11 C区SD-14（北東から）、C区SD-14土層堆積状況（南西から）
- 図版12 C区SD-18（北東から）、C区SD-18土層堆積状況（南西から）
- 図版13 D区全景（西から）、D区SE-1・SK-13（東から）
- 図版14 D区SD-6・7・26（南東から）、D区SD-6・7・20・26土層堆積状況（西から）
- 図版15 D区SB-2（北東から）、D区SB-5（北東から）
- 図版16 弥生土器、SD-2出土遺物
- 図版17 SK-2出土遺物、SE-1出土遺物
- 図版18 SD-6出土遺物
- 図版19 SD-6出土遺物、SD-7出土遺物
- 図版20 SK-13出土遺物、包含層出土遺物
- 図版21 奈良時代から鎌倉時代の遺物、土製品
- 図版22 石製品、石器

# 1. 調査の契機と経過

友田町遺跡は従来吉田窯跡（遺跡番号328）とされていた遺跡が、当調査地の約100m西側に位置する第1次調査（平成6年度）において窯跡とは別の古墳時代後期の遺構を検出したことから、新発見の遺跡、友田町遺跡（遺跡番号406）として周知されたものである。この第1次発掘調査では、古墳時代後期の溝や土坑状の遺構、古墳時代の須恵器や土師器、平安時代の黒色土器などの遺物が出土している。

今回の調査は、和歌山市友田町四丁目40番地において店舗が建築されることになり、この建築現場が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である友田町遺跡の範囲内であったため、和歌山市教育委員会が文化庁に届け出を行い、この工事に先立つ発掘調査が必要となった。このため、和歌山市教育委員会が原因者と協議を行い、遺構等の有無を確認するためのトレンチ調査（第2次調査）を実施することになり、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が株式会社ゴトウ本店から委託を受けて行った（第1図）。この第2次調査の結果、古墳時代を中心とする良好な遺構や多量の遺物群を検出したことから、さらに同市教育委員会が原因者と協議を行い、特に重要と考えられる地点について第3次調査が行われることとなり、第2次調査と同様に当財団が発掘調査を受託して実施したものである。

現地調査は、まず第2次調査が平成9年6月18日から同年8月13日までの期間で行い、また第3次調査は平成9年11月5日から同年12月25日までの期間を要した。

次に、調査面積は第2次調査においてA区が110㎡、B区が90㎡、合計200㎡であり、第3次調査ではC区が92㎡、D区が120㎡、合計が212㎡である。またA区とC区が一部重複していることから、全体の調査面積は390㎡である。



第1図 調査位置図

## 2. 位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北東端に位置し、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接し、西は紀伊水道に面している。

本市のほぼ中央を西流する紀ノ川は、奈良県の大台ヶ原に源を発する全長136kmの河川である。この紀ノ川によって運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。今回調査を行った友田町遺跡は、この紀ノ川南岸の沖積平野上に立地する。

次に周辺の遺跡を概観すると、まず縄文時代では東2.3kmに位置する鳴神貝塚(31)がある。この貝塚は、国の史跡に指定されている遺跡で、縄文時代中期から晩期にかけての土器が多数発見されており、晩期の土器に伴って弥生時代前期の土器が出土している点で縄文時代から弥生時代に移行する状況が得られるものである。

弥生時代になると遺跡の数は増し、平野部に集落が展開するようになる。弥生時代前期に始まる集落では、今回の調査地から東側500mに位置する太田・黒田遺跡(22)がある。この遺跡は、弥生時代前期から中期にかけての県下最大規模を誇る集落跡として知られ、竪穴住居や土壙墓、井戸などの遺構、銅鐸や多量の壺、甕などの弥生土器が検出されている。このほかには、紀ノ川北岸の宇田森遺跡や北田井遺跡(21)がよく知られている。しかし、これらの遺跡は、中期から後期にかけての集落跡であり、円形の竪穴住居跡などの遺構が検出されている。

弥生時代から古墳時代の移行期では、紀ノ川北岸の和歌山平野を一望する標高約25mの丘陵上に立地する府中IV遺跡(17)がある。この遺跡で検出された竪穴住居は方形のプランをもつものでは県内最大規模である。

次に、古墳時代は弥生時代に続き平野部に集落が営まれている。当遺跡の東側に位置する鳴神遺跡群には、多数の方形竪穴住居跡が検出されている。また田屋遺跡(19)や西田井遺跡(20)では多数の竪穴住居が検出され、沖積平野上に大規模な集落が展開したことが知られている。生産遺跡では近年の調査で中期から後期にかけての大規模な塩生産工房として全国的に著名となった西庄遺跡がある。また墓域では、秋月遺跡(26)で検出された前方後円墳のように集落の周辺に築造されていたものが、周辺の岩橋山塊などの山麓に移り、のちには岩橋千塚古墳群(39)などの大規模な古墳群が形成される。

歴史時代になると、当遺跡から南東1.3kmの秋月の地に鎮座する日前・国懸神宮がすでに「日本書紀」に記され、この日前・国懸神宮の勢力によって紀ノ川南岸の条里制が深く関わりをもつようである。また奈良時代から平安時代にかけての遺物は、周辺の鳴神遺跡群の発掘調査において多く出土しており、日前・国懸神宮の周辺は注目される地域の一つとされる。

また、鎌倉時代から室町時代では、近接する太田・黒田遺跡において遺物が多く出土する。特に、豊臣秀吉の紀州攻めによる太田城の水攻めがよく知られるところである。近年の太田・黒田遺跡の発掘調査において幅10m、深さ3mを測る中世の大溝が発掘され、太田城と何らかの関わりをもつ遺構として注目されている。



| 番号 | 遺跡名    | 時代    | 番号 | 遺跡名     | 時代    | 番号 | 遺跡名     | 時代    | 番号 | 遺跡名     | 時代    |
|----|--------|-------|----|---------|-------|----|---------|-------|----|---------|-------|
| 1  | 友田町遺跡  | 弥生~平安 | 16 | 高井遺跡    | 縄文    | 31 | 鳴神貝塚    | 縄文~弥生 | 46 | 和田遺跡    | 弥生    |
| 2  | 国有本遺跡  | 弥生~古墳 | 17 | 府中IV遺跡  | 弥生~古墳 | 32 | 鳴神III遺跡 | 弥生    | 47 | 寺内古墳群   | 古墳    |
| 3  | 平井遺跡   | 弥生~奈良 | 18 | 府中II遺跡  | 弥生    | 33 | 花山古墳群   | 古墳    | 48 | 山東古墳群   | 古墳    |
| 4  | 楠見遺跡   | 古墳    | 19 | 田屋遺跡    | 弥生~古墳 | 34 | 栗栖I遺跡   | 古墳    | 49 | 吉礼砂羅谷窯跡 | 古墳~奈良 |
| 5  | 大谷古墳   | 古墳    | 20 | 西田井遺跡   | 弥生~古墳 | 35 | 鳴神II遺跡  | 弥生~平安 | 50 | 吉礼III遺跡 | 弥生    |
| 6  | 晒山古墳群  | 古墳    | 21 | 北田井遺跡   | 弥生~古墳 | 36 | 井辺II遺跡  | 弥生~古墳 | 51 | 吉礼貝塚    | 縄文    |
| 7  | 雨が谷古墳群 | 古墳    | 22 | 太田・黒田遺跡 | 弥生~奈良 | 37 | 井辺I遺跡   | 弥生~古墳 | 52 | 西吉礼遺跡   | 弥生    |
| 8  | 雨が谷遺跡  | 古墳    | 23 | 太田城跡    | 安土・桃山 | 38 | 大日山I遺跡  | 古墳~奈良 | 53 | 東吉礼遺跡   | 弥生    |
| 9  | 鳴滝遺跡   | 古墳    | 24 | 木広町遺跡   | 弥生    | 39 | 岩橋千塚古墳群 | 古墳    | 54 | 千石山遺跡   | 弥生    |
| 10 | 鳴滝古墳群  | 古墳    | 25 | 鳴神VI遺跡  | 弥生~江戸 | 40 | 和佐古墳群   | 古墳    | 55 | 馬場遺跡    | 弥生    |
| 11 | 園部門山古墳 | 古墳    | 26 | 秋月遺跡    | 弥生~奈良 | 41 | 井辺遺跡    | 弥生    | 56 | 城ヶ森遺跡   | 弥生    |
| 12 | 六十谷遺跡  | 縄文~弥生 | 27 | 津秦遺跡    | 弥生    | 42 | 神前遺跡    | 弥生    | 57 | 三田古墳群   | 古墳    |
| 13 | 和田遺跡   | 弥生~古墳 | 28 | 鳴神V遺跡   | 弥生~平安 | 43 | 井辺前山古墳群 | 古墳    | 58 | 本願寺跡    | 中世~   |
| 14 | 川口遺跡   | 弥生~古墳 | 29 | 鳴神IV遺跡  | 弥生~江戸 | 44 | 和田古墳群   | 古墳    | 59 | 鷺ノ森遺跡   | 弥生~江戸 |
| 15 | 直川遺跡   | 縄文    | 30 | 音浦遺跡    | 古墳    | 45 | 和田岩坪遺跡  | 弥生~古墳 | 60 | 和歌山城跡   | 近世    |

第2図 友田町遺跡周辺の遺跡分布図

### 3. 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

調査地区の設定は、まず第2次調査において幅約2mの調査区（トレンチ）が南北の2本に分かれていたことから、従来どおり北側に位置する調査区をA区と定め、南側をB区として調査を開始した。また第3次調査では、北側の調査区をC区、南側の調査区をD区と定めて調査を行った（第3図）。

調査の方法は、当地が盛土を施した造成地であったことから第4層（古墳時代の遺物包含層）上面まで（C・D区は第3層の上面まで）重機により掘削を行い、第3・4層以下の包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。

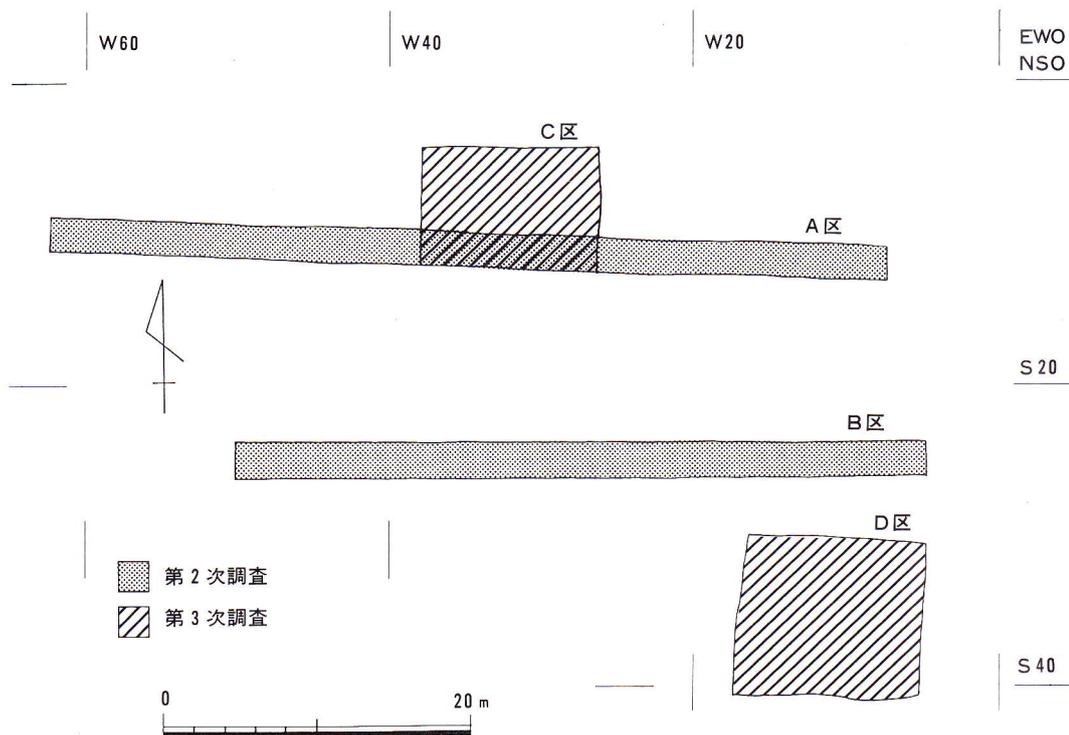
溝等の遺構掘削については、土層堆積観察用のベルトを直交するライン上に設け写真撮影を行い、2層以上の堆積が確認できたものについては実測図等の記録保存を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

次に、図面による記録は、調査範囲外北東の路上に仮原点（NS0、EW0）を設け、磁北に沿った方向をN方向とし、原点より南をS、西をWで示し、このラインを基準に実測図の作成を行った。図面の縮尺は、基本的に1/20の縮尺を用いた。平面図及び土層堆積状況図はすべて手実測で行い、重要な遺物出土状況図や特殊遺構については1/10の縮尺を用いた。

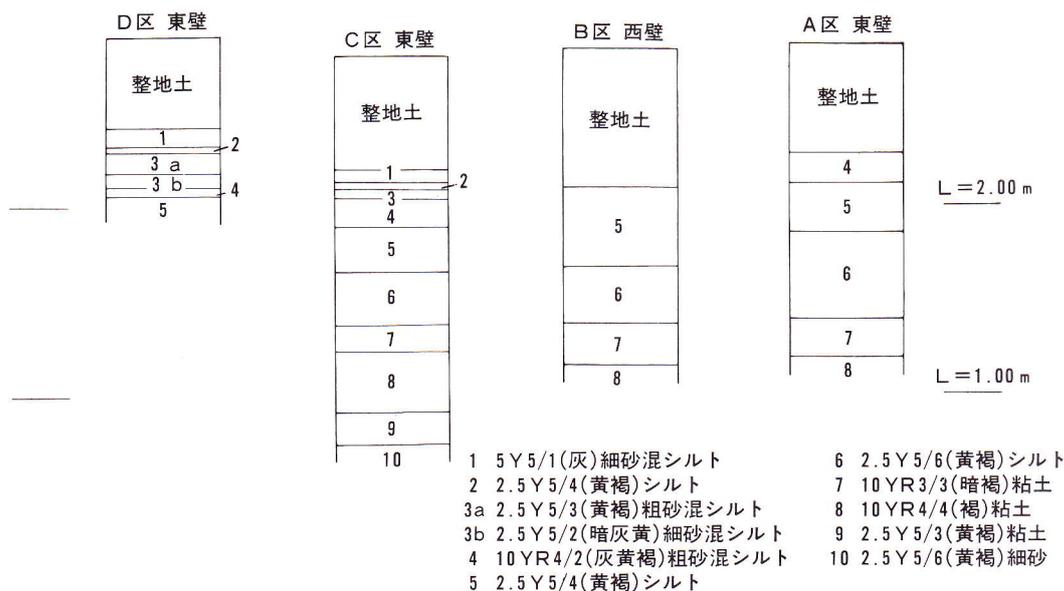
また遺跡の水準は、国家水準点を基準とした。

#### (2) 調査の概要

当調査地の基本層序は、第4図に示したとおりである。当調査地は既に造成が行われており、上



第3図 調査地区割図



第4図 調査地土層柱状模式図

部の大半が盛土層で覆われている。盛土層下は、水田耕作が行われていたとみられる旧耕作土（第1層）が堆積している。旧耕作土直下には黄褐色系の床土（第2層）がある。これらの土層は、上部盛土時にかなり削平を受け、残存していない部分が多い。この床土の下面は、灰黄褐色系の土色を呈する第3層がある。この第3層は、調査区の南西端や溝SD-6上面などの比較的低位部に厚く堆積している土層であり、部分的に2層から4層に細分することができる。包含している遺物は比較的希薄であるが、D区において一定量の遺物を包含していることを確認した。遺物は、古墳時代の須恵器や土師器に混ざりわずかであるが瓦器片を含むことから、鎌倉時代以降の堆積層であると考えられる。また、下層の第4層は古墳時代の須恵器や土師器を比較的多く含む遺物包含層であり、調査区のほぼ中央から南東側に厚く堆積している。この第4層の上面では第3層と酷似する覆土をもった溝状遺構などを検出している。さらに、第4層の下面は、今回の調査におけるほとんどの遺構を検出したベース面であり、南東端のD区における遺構検出面の標高2.0m、C区東端では標高1.9mと南東から北西にかけて緩やかに傾斜し、またA区W50m付近で深さ20cm程度の谷状の落ち込みとなる。検出した遺構は、古墳時代前期の竪穴住居SB-1や溝SD-2・20、古墳時代中期の土坑SK-2、井戸SE-1、古墳時代後期の溝SD-1・7などである。第5層は希薄であるが弥生時代中期頃の遺物を包含する堆積層であり、厚さ30cm程度を測る黄褐色系のシルト層である。第6層も第5層と同じく黄褐色系のシルト層であり、厚さ30cmを測る。この層位から下層は無遺物層とみられる。第7層から第9層までは褐色系の粘土質となり、さらに下層の第10層は黄褐色系の細砂となる。

## 4. 遺構

今回の調査において検出した遺構は、古墳時代のものについては第5層上面を検出面とし、鎌倉時代のものについては第4層上面において検出したものである。

遺構については、第2次調査でのみ検出したものについて先にふれ、第3次調査において特に明確にしたSB-1やSD-2・6・20などは次節でまとめて説明する。

### (1) 第2次調査

A区において溝及び溝状遺構、竪穴住居の壁溝状遺構やピットなどを検出している。また、B区では溝、ピット、土坑や西端のサブトレンチ内において噴砂を検出している。以下、各遺構について述べる。

#### 古墳時代前期の遺構（第5図）

古墳時代前期の遺構では、A区からB区にかけて検出したSD-20やA区で検出したSD-2、B区で検出したSD-8がある。

**SD-8** SD-8は、B区W47m付近で検出した幅4m、深さ25cmを測る溝である。この溝の覆土は黄褐色系のシルト質の単層で遺物をほとんど含まない。

#### 古墳時代中期の遺構（第5図）

古墳時代中期の遺構は比較的希薄であり、主としてSK-2が挙げられる。

**SK-2** SK-2はB区W27m付近で検出した不定形の土坑である。この土坑は南北両壁によって範囲外にのびるため全体は不明ながら、東西4.0m以上、南北2.0m以上の規模をもち、深さは10cm程度と比較的浅い。この土坑には多量の須恵器や土師器が含まれていたことから、土器廃棄土坑と考えられる（図版6）。

#### 古墳時代後期の遺構（第5図）

古墳時代後期の遺構は最も多く、A区ではSD-14・18や谷状の堆積と考えられるSX-1があり、A区からB区にかけて連続する遺構としてSD-1・7があり、またB区ではSA-1やSK-3・5・6などがある。

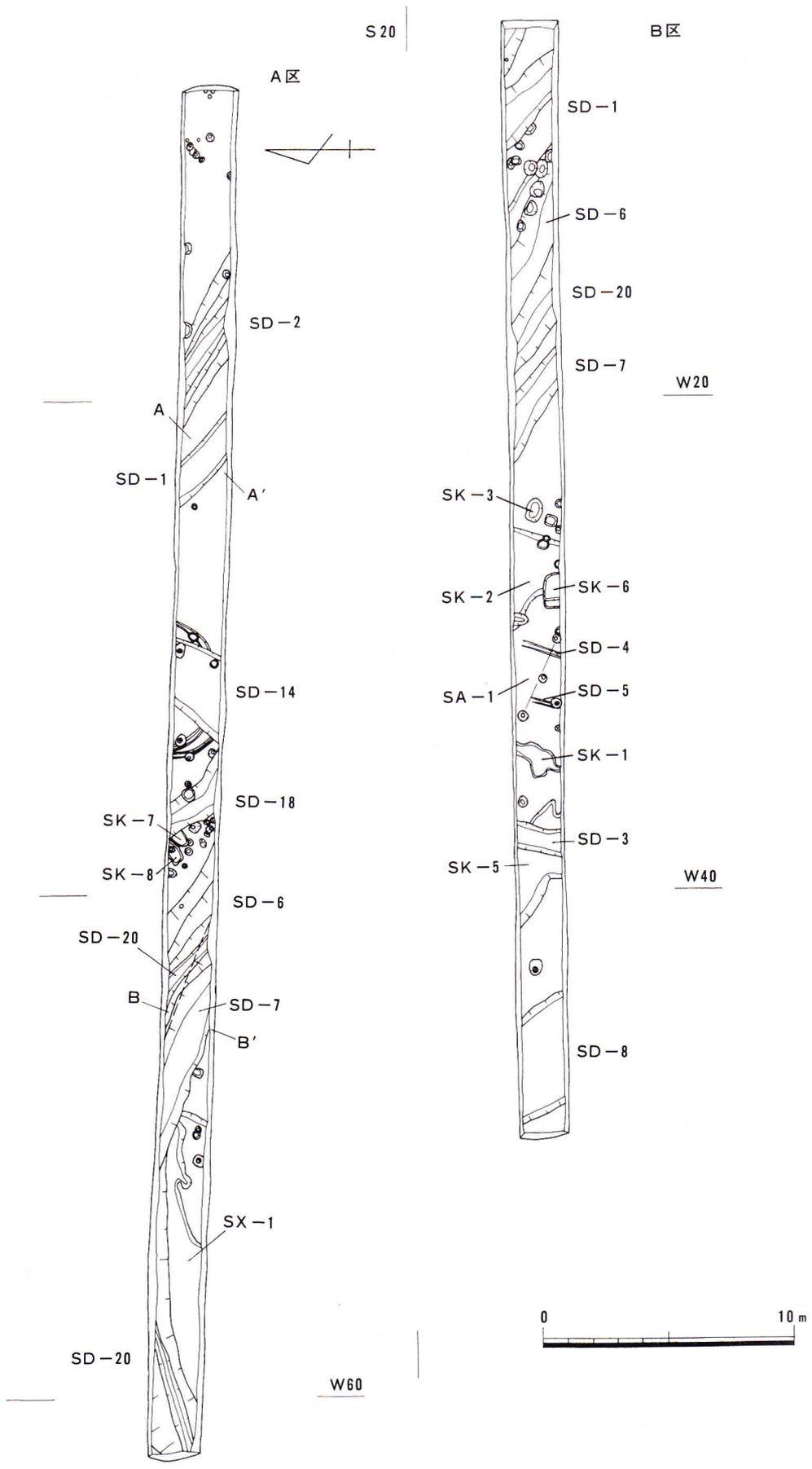
**SA-1** SA-1は、B区W30～33m付近で検出した柱間1.8mを測る柵列で径30cm程度を測る円形のホリカタをもつ。また柱芯は直径14cm前後で50cm程度の深さである（図版8上）。

**SD-1** SD-1はA区W22m付近及びB区W7m付近で検出した幅1.3～1.5m、検出面からの深さ30～40cm前後を測る溝で、N-47°-Wの方向性をもつ。また底面の標高はA区で1.7m、B区で1.6mを測ることから、溝の流路方向は北西から南東であるとみられる。この溝の覆土は、黄褐色系のシルト質であり、2層に分層できる（第6図、図版3）。

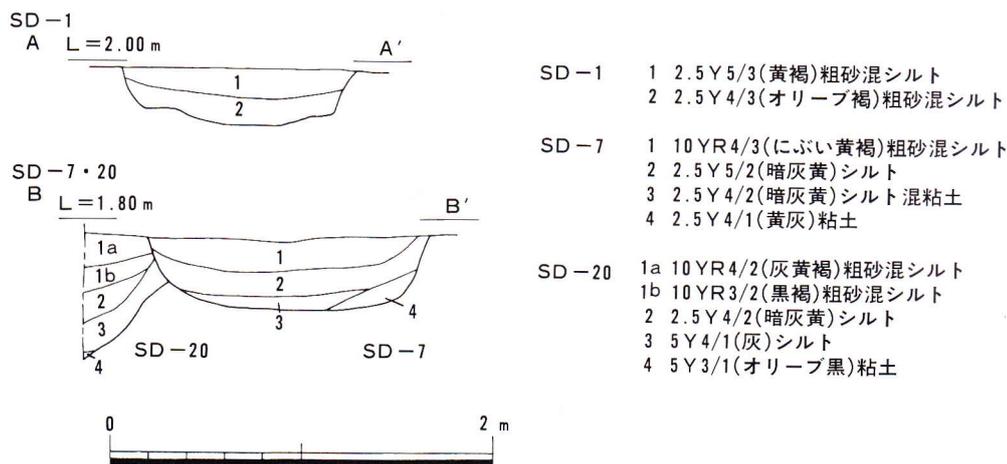
**SK-5** SK-5はB区W40m付近で検出した不定形の土坑であり、中央部をSD-3により削平を受けている。遺物は希薄で少量の須恵器・土師器が出土している。

**SK-7・8** SK-7・8の土坑はW38m付近で検出したものである。これらはともにSD-18に切られた不定形の土坑で、少量であるが須恵器、土師器が出土している。

**SX-1** SX-1はA区W49mより西側全体に広がる谷状の堆積とみられ、2層に分層できる褐色系の



第5図 第2次調査遺構全体平面図



第6図 SD-1及びSD-7・20土層断面図

粗砂であり、多量の須恵器、土師器に混ざり滑石製紡錘車が1点出土している。

このほか、A区ではW10m付近とW37m付近に集中してピット群を検出し、またB区ではW10m付近とW25m付近に集中してピット群を検出している。これらからは希薄ながら古墳時代後期頃の須恵器、土師器が出土している。

#### 鎌倉時代の遺構

鎌倉時代の遺構はまずA区において溝状遺構5条とピット1個を検出した。この溝状遺構はW15m付近とW40m付近の2ヶ所に集中し、東側のSD-9・10は磁北N-60° -W、西側のSD-11~13は磁北N-48° -Wのそれぞれ方向性をもつ。これらはともに農耕に関する小溝群と考えられる。

次に、B区では溝状遺構3条 (SD-3~5)、不定形の土坑1基 (SK-1) を検出している。これらの遺構はW30~40m付近に集中し、特に溝状遺構は磁北N-10~20° -Eの方向性をもつ。このことから、A区の同時期の溝状遺構とは異なり、A区とB区との間には土地の区画割りが存在するものと考えられる。

#### 噴砂

調査区西端に設定した下層調査のための深掘トレンチ内において噴砂を検出した。この噴砂は、下層の粗砂が地震により液状化現象を起こし亀裂を通じて上層に吹き上げたものである。この状況は平面的には磁北N-20° -Wの方向性をもつ。この砂脈は無遺物層と考えられる第6・7層を貫き、弥生時代中期の遺物包含層 (第5層) でとまる。このことから、少なくとも弥生時代中期以前に発生した地震により起こった現象であることが推察できる (図版8下)。

#### (2) 第3次調査

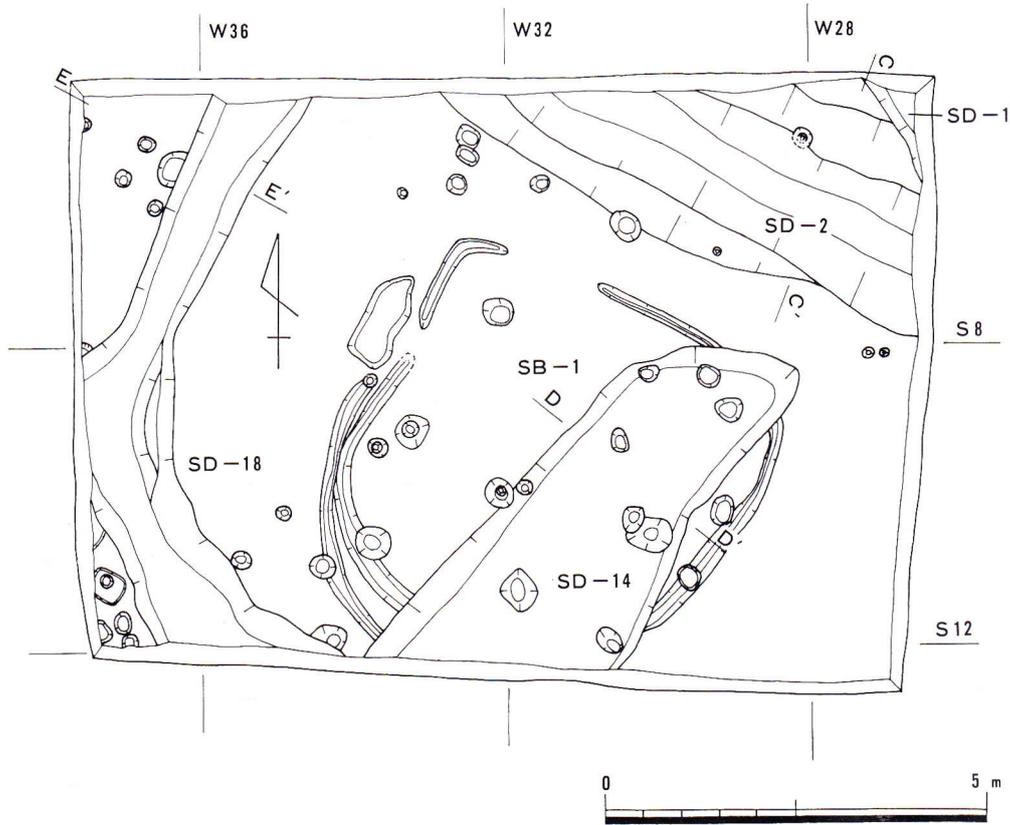
第3次調査における遺構の記述は、二つの調査区が離れていることより、便宜的に各調査区に関係する遺構について分けてふれることとする。

##### [C区の調査]

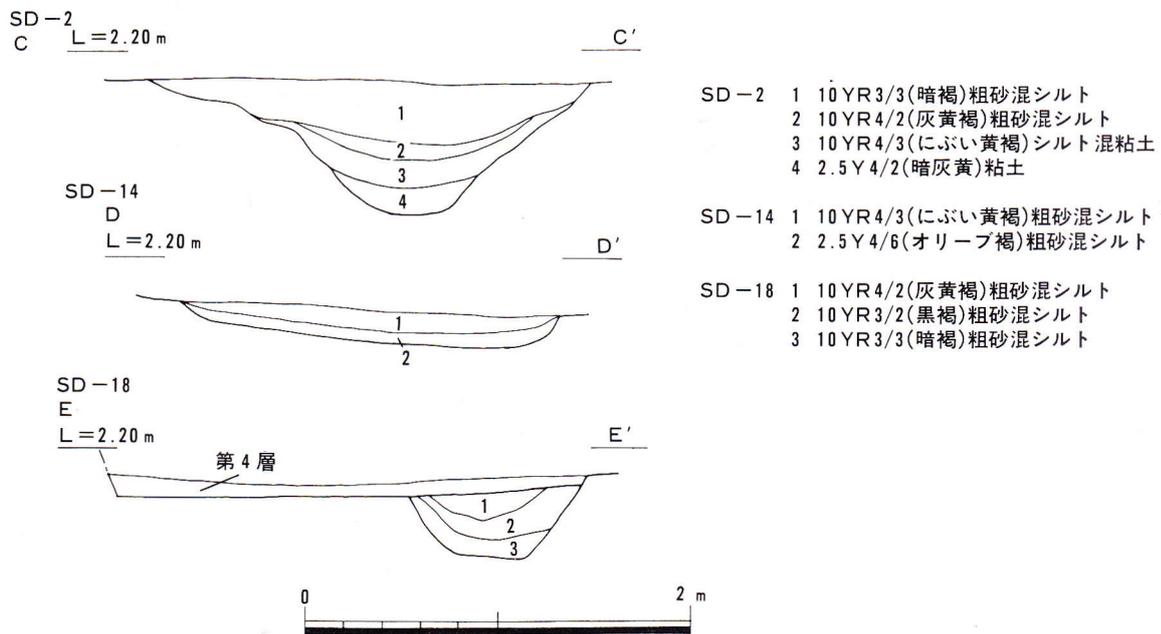
#### 古墳時代前期の遺構 (第7図)

SB-1 SB-1はほぼ調査区の中央部で検出したやや不定形気味の隅円方形プランを呈した竪穴住居とみられる。この遺構は古墳時代後期の溝状遺構SD-14によって削平を受け、一部が既に失われて

いる。検出したのは、ほぼ全周する幅20cm程度の壁溝とその範囲内に並ぶ柱穴群である。この竪穴住居は、検出した二条の壁溝から古段階においてP-1・2・6・7の4本柱の住居であったものを南側と西側に拡張したものとみられ、P-5などは拡張後の主柱穴と考えられる。このことから、古段階では一辺5.0m、新段階では一辺5.3m程度の規模であったものとみられる（第9図、図版9下）。



第7図 C区遺構平面図



第8図 SD-2・14・18土層断面図

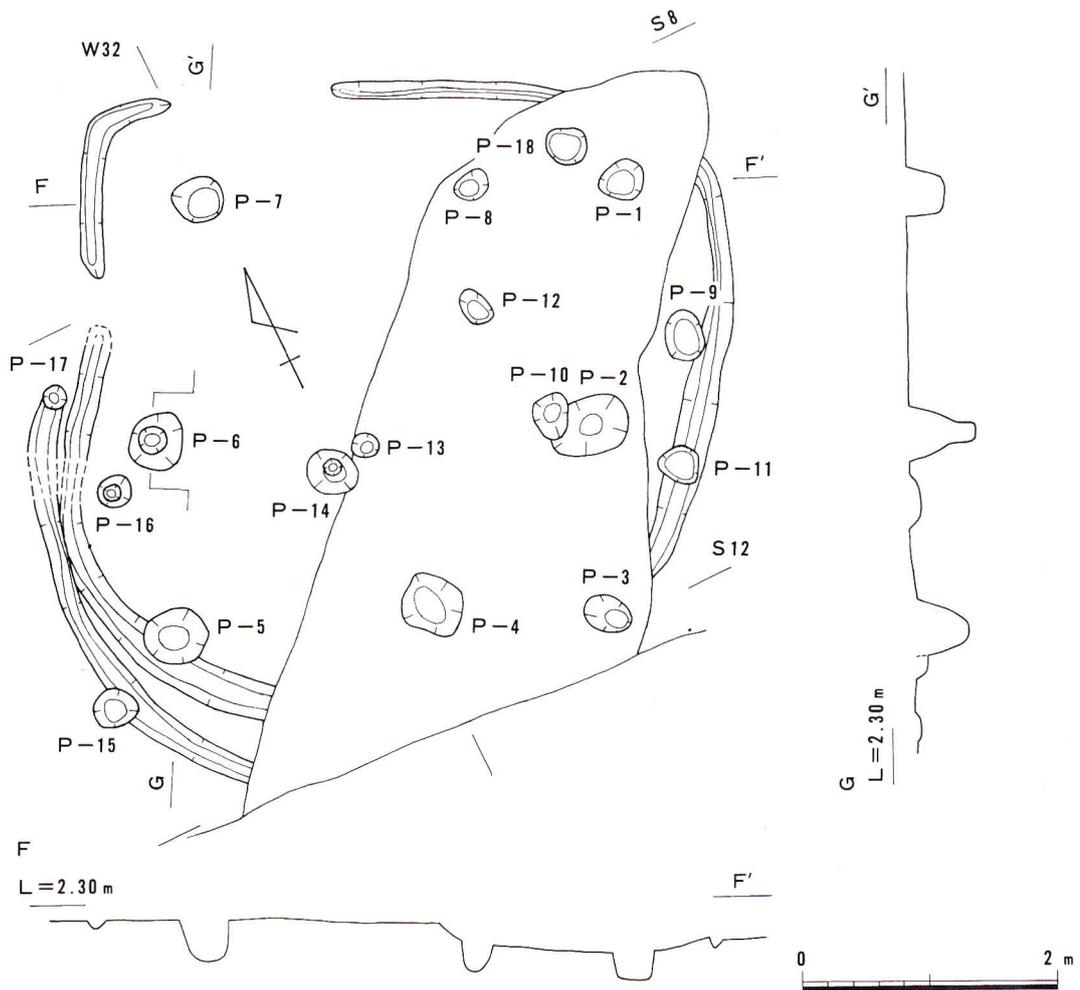
**SD-2** SD-2はA区W17m付近とB区東端で西肩のみを検出した溝であり、C区において良好な堆積状況を検出した。溝の規模は、幅2.0m、検出面からの深さ70cm前後を測る。この溝の堆積は4層に分けられ、灰褐色系のシルト質で最下層が粘土質となる（第8図、図版10）。この溝はA・C区から磁北N-55°-Wの方向性がみられる。

**古墳時代後期の遺構（第7図）**

**SD-14** SD-14はC区南壁ほぼ中央から北東方向にのびる溝状遺構である。この遺構の主軸は磁北N-45°-Eで他の溝とは方向性が異なり、S 8 m付近で途切れている。規模は幅2.6m、検出面からの深さ20cmを測る。また覆土は2層に分層できる（第8図、図版11）。

**SD-18** SD-18はC区W36m付近で検出した溝であり、幅1.0m前後、検出面からの深さ40cmを測る。この溝はS 9 m付近で大きく屈曲する。またこの溝を境として西側は、遺構検出面が10cm程度落ち込むため第4層が堆積している。この状況は土層断面図において示した（第8図、図版12）。溝の堆積は3層に分けられ、褐色系のシルト質である。

このほか、調査区の北東端でSD-1の延長部と数個のピットを検出した。



第9図 C区SB-1遺構平面図及び断面図

### 古墳時代以降の遺構

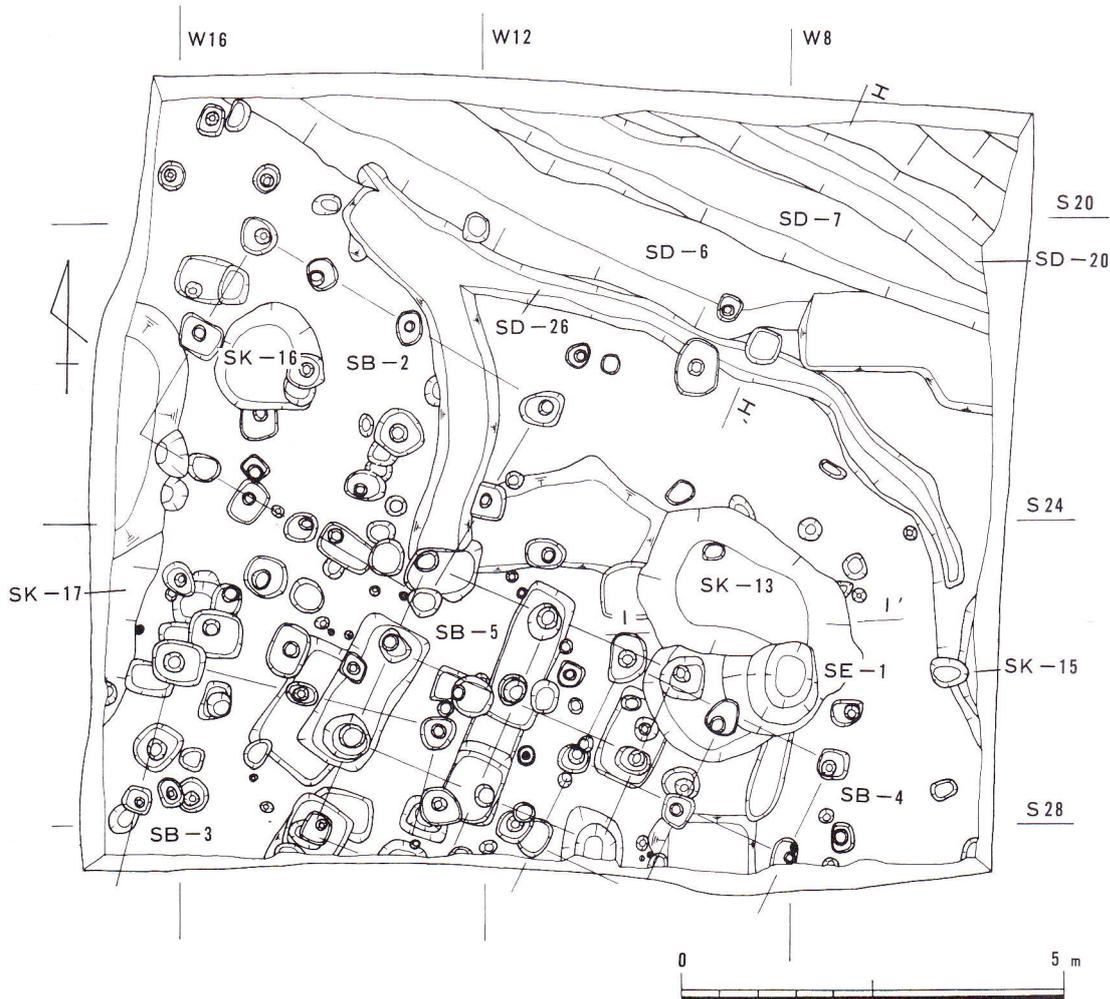
この調査区においても第4層上面において鎌倉時代のものみられる幅40cmを測る溝1条と幅15cm程度の溝4条を検出した。これらは、検出面からの深さ約10cmを測る小溝であり、その方向性は全てN-55°-Wの方向性をもつ。

また第3層上面において江戸時代のものみられる土坑を1基検出した。この土坑は調査区西壁のSD-18上において検出したもので、東西60cm以上、南北1.6mを測る。この土坑からは唐津焼の皿が1点出土している。

### [D区の調査]

#### 古墳時代前期の遺構 (第10図)

**SD-20** SD-20はA区W41~62m、B区W17m付近及びD区北東端で検出した溝である。この溝は、そのほとんどが古墳時代中期の溝 (SD-6) の底面で検出したものであり、上部が失われている。また、D区からA区にかけて磁北N-55°-Wの方向性をもつが、A区においてほぼ90°に屈曲し、大きく弧を描くものである。溝の規模を復元すると、幅1.2m以上、検出面からの深さ1.1m前後を測る。底面の標高はA区で約0.9m、D区でも同じく約0.9mを測ることから、ほぼ水平に推移する状況が観察できる。この溝の堆積は3~5層に分けられる。覆土は、上層では暗灰色系のシルト質で



第10図 D区遺構平面図

あるが、下層ほど粘土質となる（第6・11図、図版4下・14下）。

このSD-20は先述したSD-2と同時期のものであり、ともに磁北N-55° -Wの方向性を示し、さらに北側においてほぼ平行して屈曲するとみられることから、この2条の溝は何らかの関連をもつものと考えられる。

#### 古墳時代中期の遺構（第10図）

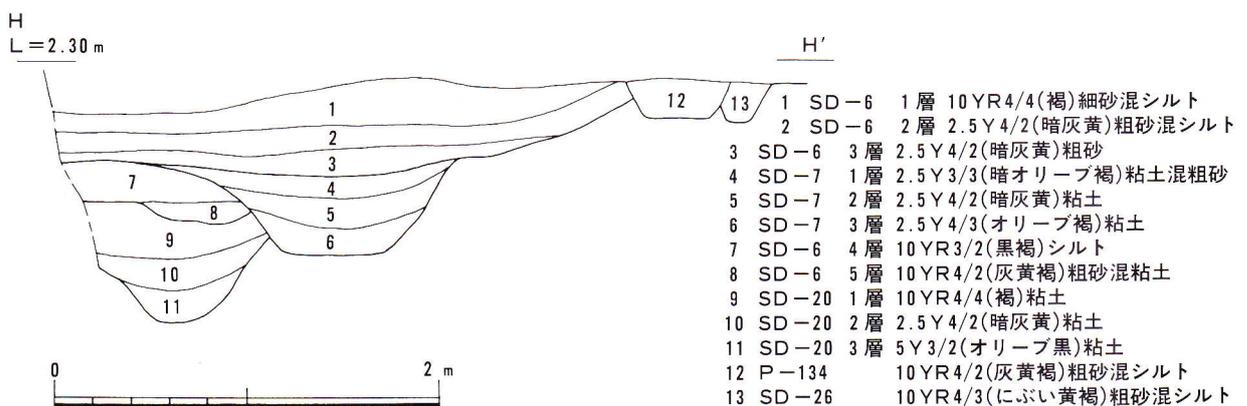
**SE-1** SE-1はS26m、W 8 m付近で検出した素掘りの井戸である。上部は古墳時代後期の土坑SK-13によって削平を受けている。この井戸は長径1.1m、短径0.9mを測る楕円形であり、底面は、遺構検出面より1.2mの深さを測る。出土した遺物は須恵器の蓋杯や土師器の甕などがある。

#### 古墳時代後期の遺構（第10図）

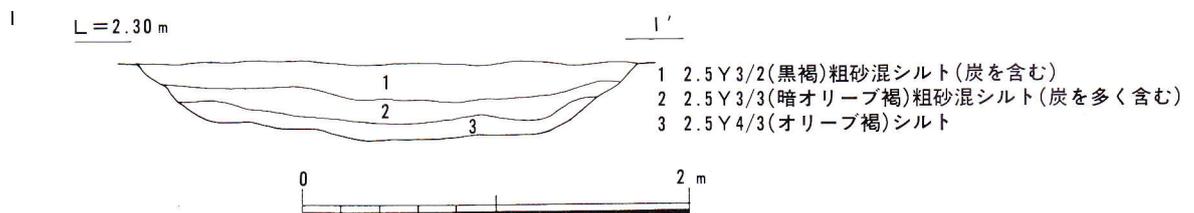
**SD-6・7・26** ここでふれるSD-6・7・26は、すべて関連性をもつ遺構とみられる（第11図、図版14）。まずSD-6はA・B・D区を通してほぼ直線的にのびる溝であり、その方向性は磁北N-70° -Wである。この溝の規模はB区で復元した結果、幅約8mを測り、検出面からの深さ65cmを測る。堆積は5層に分けられ、上層の2層は暗褐色系のシルト質で、3層が粗砂となる。この3層には多量の遺物が含まれる。また4層は黒褐色系のシルト、5層は灰褐色系の粘土であり、一定量の須恵器、土師器が含まれる。特に、4層からはB区において滑石製の勾玉や剣形模造品、有孔円板が一括出土している。この4・5層が堆積した時点で再掘削を行ったとみられる溝がSD-7である。

SD-7は、A区では第6図に示したとおりSD-20と重なりをもって検出している。またB区ではSD-6の西肩に沿って検出しており、幅1.3m、遺構検出面からの深さ70cm前後を測る。さらに、D区においてSD-6の再掘削の溝であることが明らかとなった。この溝の堆積は3層に分層でき、下層ほど粘質が強い。

SD-26は、D区においてSD-6の南肩に沿った状況で検出した溝である。この状況から溝に平行する掘立柱建物とSD-6との両者に関係する何らかの溝と考えられる。



第11図 SD-6・7・20・26土層断面図

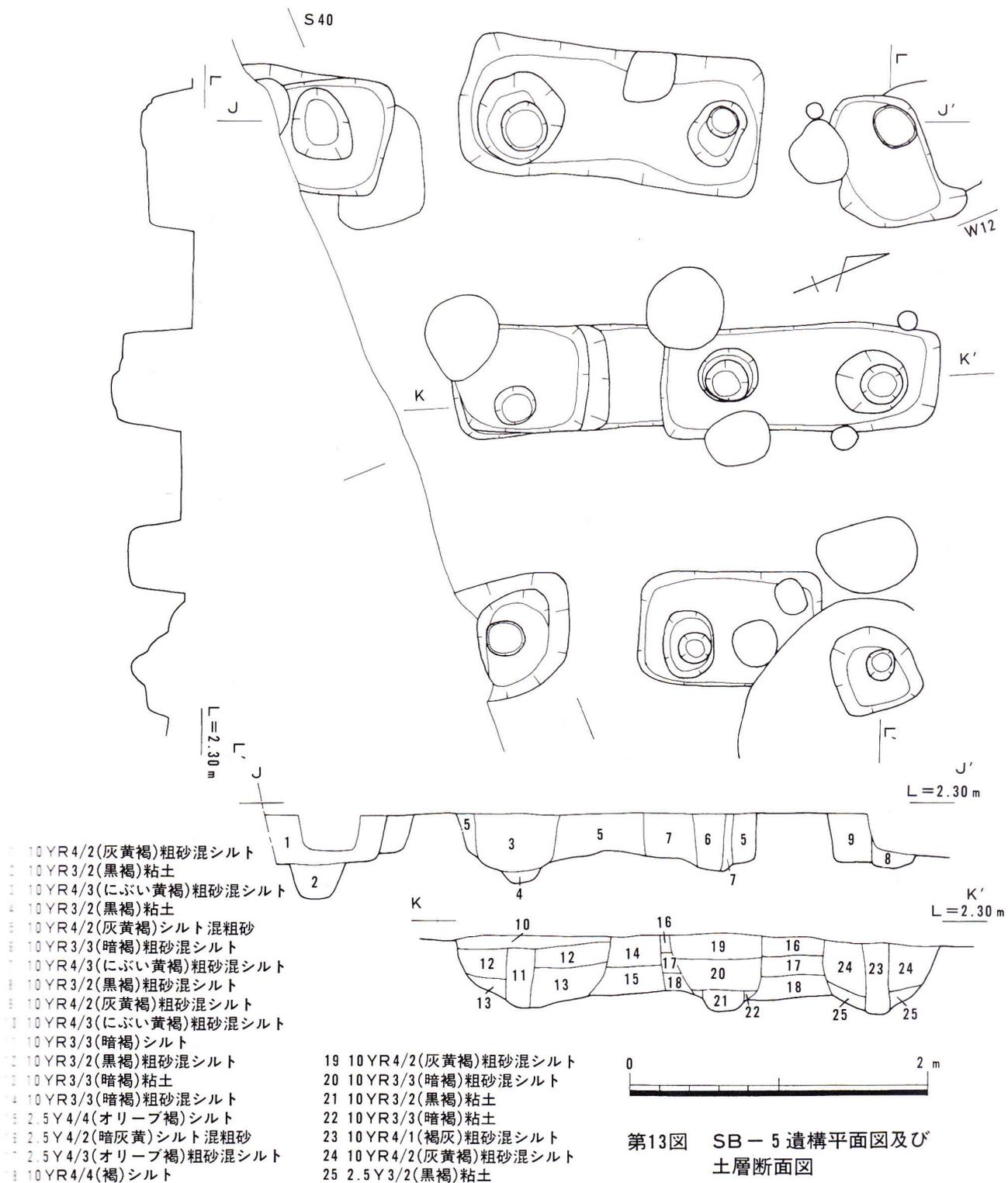


第12図 SK-13土層断面図

SB-2 SB-2はS23・W14mを中心に検出した掘立柱建物である（図版15上）。この建物の規模は、梁行2間（3.0m）、桁行3間（4.3m）であり、主軸は磁北N-60° -Wである。この建物のホリカタは径40cm程度の隅円方形のプランであり、柱芯は20cm前後を測る。

SB-3 SB-3は南西端において検出した掘立柱建物である。この建物の規模は、梁行2間（3.6m）、桁行1間（1.8m）以上であり、主軸は磁北N-15° -Eである。

SB-4 SB-4はS28・W9mを中心に検出した総柱の掘立柱建物である。この建物の規模は、梁行



2間 (3.0m)、桁行2間 (2.7m) 以上であり、主軸は磁北N-25° -Eである。

**SB-5** SB-5はS28・W12mを中心として検出した総柱の掘立柱建物である (図版15下)。この建物の規模は、梁行2間 (3.5m)、桁行3間 (3.7m) 以上であり、主軸は磁北N-23° -Eである。この建物はいわゆる布掘り状のホリカタを掘削した後、丁寧に埋め戻しを行い、さらに60~100cmを測る隅円方形のホリカタを掘削し、柱を据えている。柱芯の大きさは、直径25~30cmを測り、他の建物に比べ柱の規模が大きいものである。

**SK-13** SD-13はS26・W9m付近で検出した不定形の土坑である (図版13下)。この土坑は長径3.3m、短径2.6mを測り、底面の深さは、遺構検出面より40cmを測る。出土した遺物は須恵器の蓋杯や土師器の甕、カマドなどがある。この土坑の堆積は3層に分層でき、覆土中に炭を多く含む (第12図)。

このほか、SD-6から南側において同時期のピットを調査区全面に検出した。ピットは遺物や覆土の状況からほとんどが古墳時代後期のものと考えられるが、数個のピットから瓦器片が出土しており、鎌倉時代のものも含まれているとみられる。

## 5. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺構の覆土や第3層及び第4層の遺物包含層より弥生時代中期から鎌倉時代の遺物を検出している。また上層の第1・2層から少量の江戸時代の遺物が出土している。

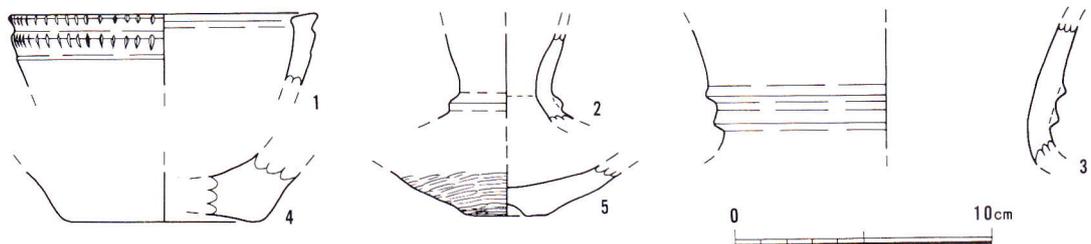
まず弥生時代の遺物では、少量ではあるが中期に比定できる壺の破片がある。また弥生時代から古墳時代の移行期にあたる庄内併行期の甕底部が1点出土している。

古墳時代の遺物は前期の布留併行期の壺や甕、鉢などがSD-2から出土している。また中期から後期ではB区のSD-6やSK-2などから多くの須恵器、土師器が出土している。これらの器種構成は、須恵器の蓋杯・高杯・壺・甕・甗や土師器の杯・高杯・壺・甕・埴・甗・カマド・製塩土器・手づくね土器などがある。また土錘やファイゴが出土している。

このほか、少量ではあるが、奈良時代の須恵器や土師器、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の瓦器や土師器が出土している。

また石器では、弥生時代から古墳時代にかけてのものと思われる叩き石や古墳時代のものと思われる砥石が出土している。さらに、石製品として滑石製模造品が出土している。

本書では、これらの遺物を大きく各時代に分類してふれ、そのなかで遺構一括出土資料としてSD-2やSK-2などをまとめた。また製塩土器や石器などの特殊遺物は、最後に記述した。



第14図 遺物実測図1

(1) 弥生時代の遺物 (第14図、1～5)

1～4は弥生時代中期の遺物である。1は口縁部外端面に凹線文を施したのち刻み目を入れた直口壺である。2は細頸部の頸部であり、括れ部外面に1条の貼り付けによる突帯文をもつ。3は同じく頸部外面に2条の突帯文を施した広口壺である。4はやや上げ底状の底部であり、底部径7.2cmを測る。これらの時期では、2・3はIII様式併行期、1はIV様式併行期の古段階にそれぞれ比定できるものである。

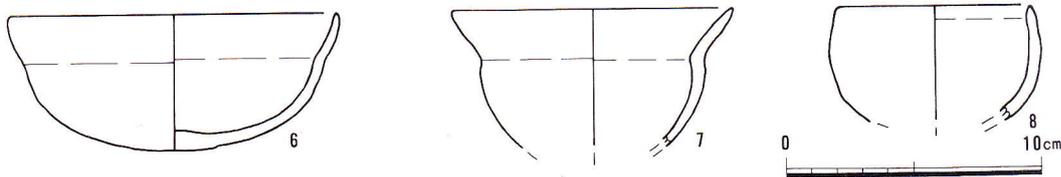
5は庄内併行期の甕底部である。外面にはタタキ調整が明瞭に観察できる。

(2) 古墳時代の遺物

[遺構出土の遺物]

SD-2出土遺物 (第15図、6～8)

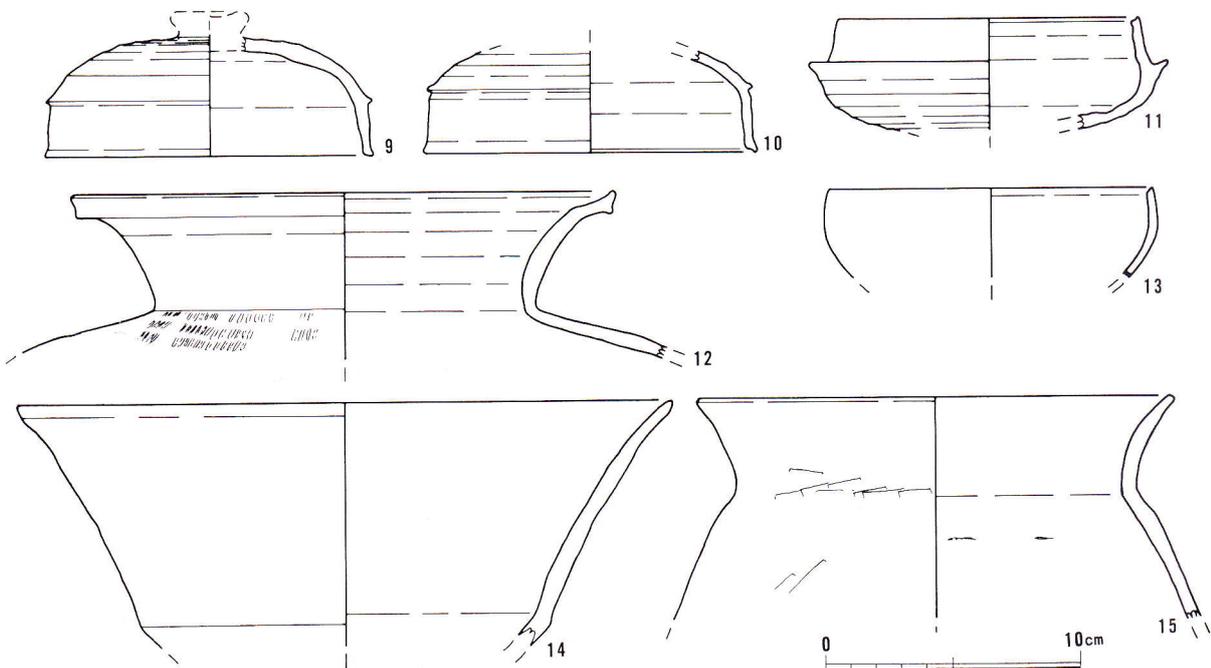
6～8は古墳時代前期の布留併行期の土師器である。6・7はいわゆる小型丸底壺の系譜をひく器種である。6は口径12.8cmを測り、口縁端部を強いヨコナデによってやや内彎させるタイプである。7は口径11.0cmを測るもので頸部からのびる口縁部を大きく外反させるタイプである。また外面には黒斑が観察できる。8は口径7.4cmを測る小型の杯である。これらの時期は、布留併行期の新段階の一括資料である。



第15図 遺物実測図 2

SK-2 出土遺物 (第16図、9～15)

9は須恵器の有蓋高杯の蓋、10・11は蓋杯である。9・10はともに天井部約1/2を回転ヘラケズリ調整によっている。口径は12.5cm前後とまとまり、シャープな造りをしている。また9の天井部



第16図 遺物実測図 3

には擬宝珠様のつまみが付くとみられる。11は蓋杯の杯身である。底部下半は回転ヘラケズリ調整を施し、口縁部周辺はミズビキによりシャープに仕上げている。また12は須恵器の甕であり、外反しながらのびる口縁部を上方に肥厚させ、丸くおさめている。体部外面には平行タタキの痕跡が残るが、内面同様に指ナデにより消している。

13は土師器の杯であり、復元径12.5cmを測る。14は口径25.5cmを測る大型の高杯杯部で大きく外反して口縁部を形成する。これらはともに剥離が著しく調整は不明瞭である。また15は土師器の甕であり、口縁部を「く」の字状に屈曲させている。体部外面には板状工具の圧痕がのこる。

これらの遺物は、須恵器からTK47型式に比定でき、5世紀末から6世紀初頭頃の所産とみられる一括資料である。

#### SE-1出土遺物（第17図、16～20）

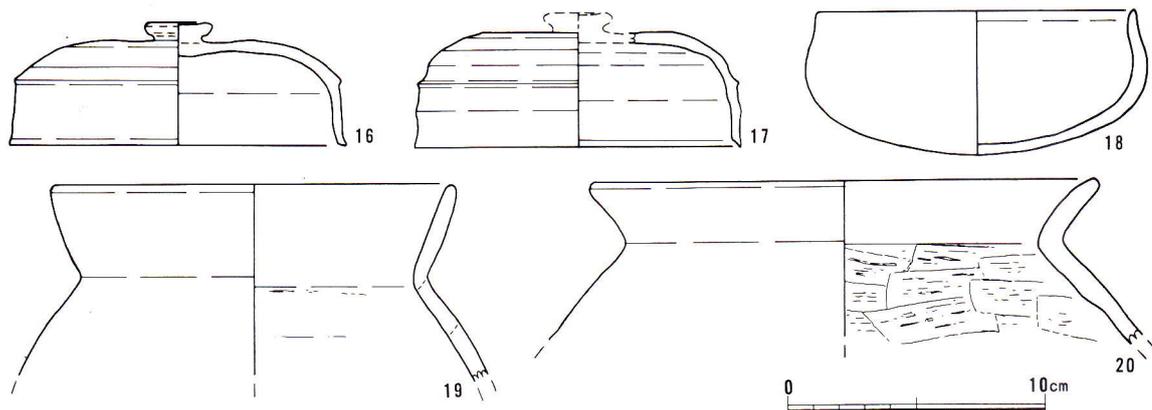
16・17は須恵器の有蓋高杯の蓋である。これらは天井部に擬宝珠様のつまみが付くもので約1/2以上に回転ヘラケズリ調整を施している。口径は13.0cm前後とまとまり、肩部には明瞭な凸線を施すシャープな造りをしている。

18は口径12.4cmを測る土師器の杯である。口縁部は強いヨコナデによって外上方にやや屈曲する。19・20は土師器の甕である。これらはともに口縁部を「く」の字状に屈曲させている。また20の内面には明瞭な板状工具によるケズリの圧痕が観察できる。

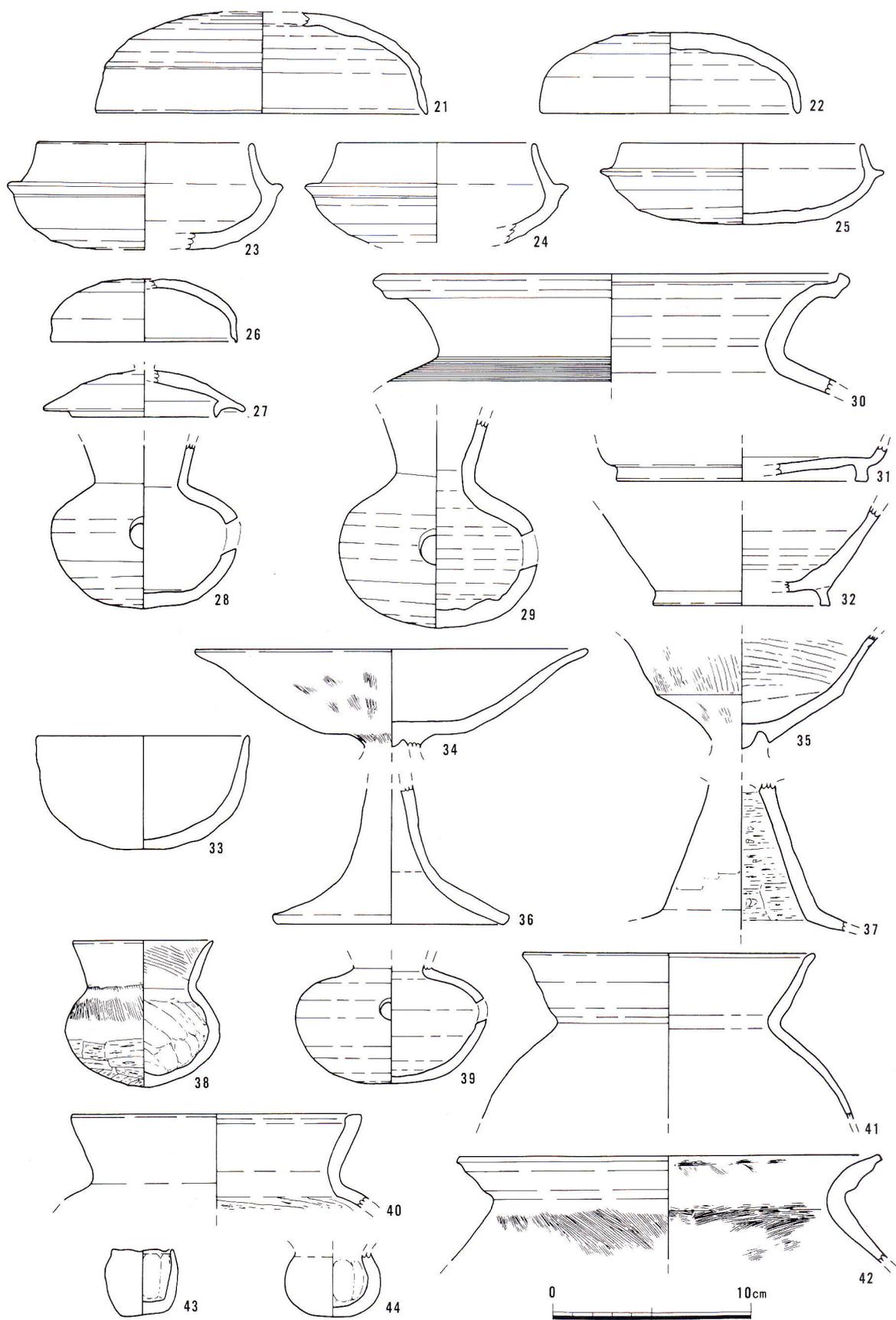
これらの遺物は、須恵器からTK47型式に比定でき、先述のSK-2にほぼ併行関係にあると考えられる。

#### SD-6出土遺物（第18図、21～42）

須恵器では、蓋杯、壺、甗、甕がある。21・22・26・27は杯蓋である。21は口径17.0cmを測る比較的大きなもので、口縁部内端面にやや段をもつ。22は全体的に丸みを帯びたもので、肉厚な器壁をもつ。これらは、天井部約1/2に回転ヘラケズリ調整を施している。26は口径9.4cm測るもので、口縁部内端面に明瞭な段をなす。また27はいわゆるかえりがみられる蓋で、欠失している天井部には宝珠様のつまみが付くものである。23～25・31は杯身である。23・24はやや肉厚な器壁をもつもので、底部約1/2には回転ヘラケズリ調整を施し、ミズビキによる口縁部は丸く仕上げている。また外面に1条のヘラ描き沈線を施している。25は口径12.4cmを測るもので、底部約2/3を回転ヘラケズリ調整によっている。31は第1層から出土したもので貼り付けによる高台が付くものである。28・29はともに口縁部が欠失した甗である。これらの体部は球体をなし、中央部に径1.7cm大の円孔を



第17図 遺物実測図 4



第18図 遺物実測図 5

施している。体部最大径は、28が9.6cm、29が10.2cmを測る。また底部は回転ヘラケズリ調整によっている。30は甕の口縁部である。大きく外反しながらのびる口縁部を上方に肥厚させ明瞭な段をなす。頸部下の外面には回転カキメ調整が施されている。32は貼り付けによる高台が付く壺の底部であり、底径9.0cmを測る。

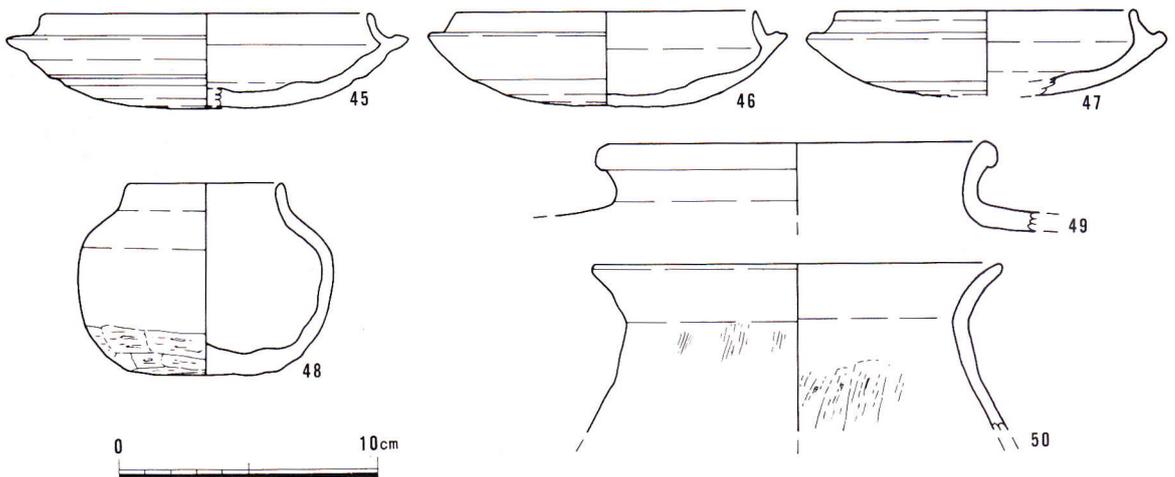
次に土師器では、杯・高杯・壺・甕・手づくね土器が出土している。まず33は半球形の杯であり、口径10.7cmを測る。34～37は高杯である。34は比較的浅い杯部で外面に細かいタテ方向のハケ調整を施している。またやや外反して大きく開く口縁部をもつ。35は深い杯部で内面にはヨコ方向、外面にはタテ方向の粗いハケ調整を施している。また脚部は36のように緩やかに開き接地するものと37のように屈曲して接地するものがある。これらの調整では36は不明瞭であるが、37から外面に板状工具による調整を指ナデにより消している状況と内面にヨコ方向のヘラケズリ調整が観察できる。38は小型丸底壺である。外面は頸部下をタテハケ調整し、底部周辺をヘラケズリ調整によっている。また口縁部内面にはナナメ方向のハケ調整がみられ、体部内面には指頭による圧痕が顕著に観察できる。39は甕である。体部はやや扁平な球形をなし、中央部に径1.1cmの円孔を施している。この甕の成形はマキアゲ、ミズビキによっていることから須恵器技法を用いたものといえる。40～42は土師器の甕である。口縁部はすべて「く」の字状に屈曲するが、端部を内側に肥厚させるもの(40)や端部を外方向に折り曲げ面をもたしているもの(41)、口縁部全体を肥厚させ、強いヨコナデによって段をなすもの(42)などがある。これらの調整は40より内面にヘラケズリ調整が、42より内外面にハケ調整がそれぞれ観察できる。43・44は手づくね土器である。これらの器種は43が杯、44が壺とみられる。

これらの出土層位は次の通りである。第1層は24～29・31・32・36・39・42、第2層は21・23・37・40・44、第3層は22・33～35・38・41、第4層は30、第5層は43である。

これらの遺物は、須恵器からMT15型式からTK217型式に併行するものが含まれ、また第1層から出土した31・32から奈良時代まで埋没が下ることが明らかである。このことから、SD-6の新段階の時期はTK209型式併行期（6世紀末）とみられ、また古段階の時期はSD-7との関係をふまえ6世紀の前葉頃と考えられる。

#### SD-7出土遺物（第19図、45～50）

まず須恵器では、45～47の蓋杯がある。これらは45より口径12.7cm、46・47より11.6cmを測り、



第19図 遺物実測図 6

ともに底部約1/2以下を回転ヘラケズリ調整によっている。また45の底部にはヘラ描きによるとみられる沈線が1条めぐる。器高は比較的lowく、3.5cm前後である。48はやや丸みをおびた完形の須恵器の短頸壺であり、口径6.0cm、体部最大径10.0cmを測る。この壺の底部周辺には明瞭なヘラケズリ調整が観察できる。また49は口径14.8cmを測る須恵器の壺であり、口縁端部を下方に丸く肥厚させている。

土師器には50の甕がある。この甕は体部の張りが小さいもので、口径16.0cmを測る。外面の調整はタテハケを施したのち指ナデによつてこれを消している。また内面の調整はタテ方向のケズリ調整が観察できる。

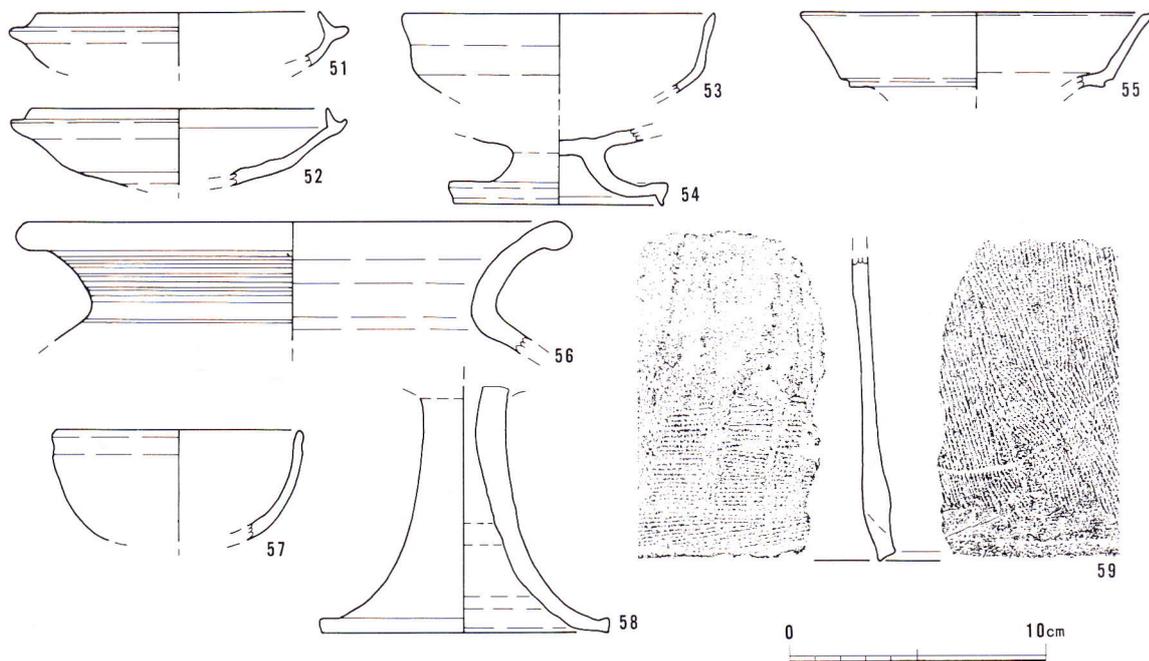
これらの遺物は、須恵器からTK43型式に比定でき、6世紀後半の所産と考えられる一括資料である。

### SK-13出土遺物（第20図、51～59）

須恵器では、51・52の杯身がある。これらは口径11.0～11.5cmを測る比較的小さいもので、底部約1/3程度を回転ヘラケズリ調整によっている。口縁部のたしがりは低く、器高3.0cm程度のものである。53・54は須恵器の無蓋高杯である。口縁部(53)はやや丸みをもつ。脚部(54)は扁平に大きく開き、下方に屈曲して接地するタイプである。また55は口径13.8cmを測る甕の口縁部とみられる。56は口径20.8cmを測る比較的大型の壺である。大きく開く口縁部は下方に丸く肥厚させ、全体的に肉厚な器壁をもつ。また頸部には回転カキメ調整が施されている。

土師器では杯、高杯などがある。57は口径9.5cmを測る杯であり、口縁部外面にヨコナデ調整による段が残る。58はミズビキ成形により、シャープに仕上げられた高杯脚部である。これらの胎土には結晶片岩が含まれている。

59はカマドの底部である。この底部の調整は、外面に5～6本/cmの明瞭なタテハケが観察できる。また内面には底部から5cm程度まで同様のヨコハケ調整がみられ、さらにこれを指頭によりナデ上げて消している状況が確認できる。色調は外面が淡褐色であるのに対し、内面は暗褐色に変色



第20図 遺物実測図 7

している。また胎土には結晶片岩が含まれていることから在地系のものとみられる。

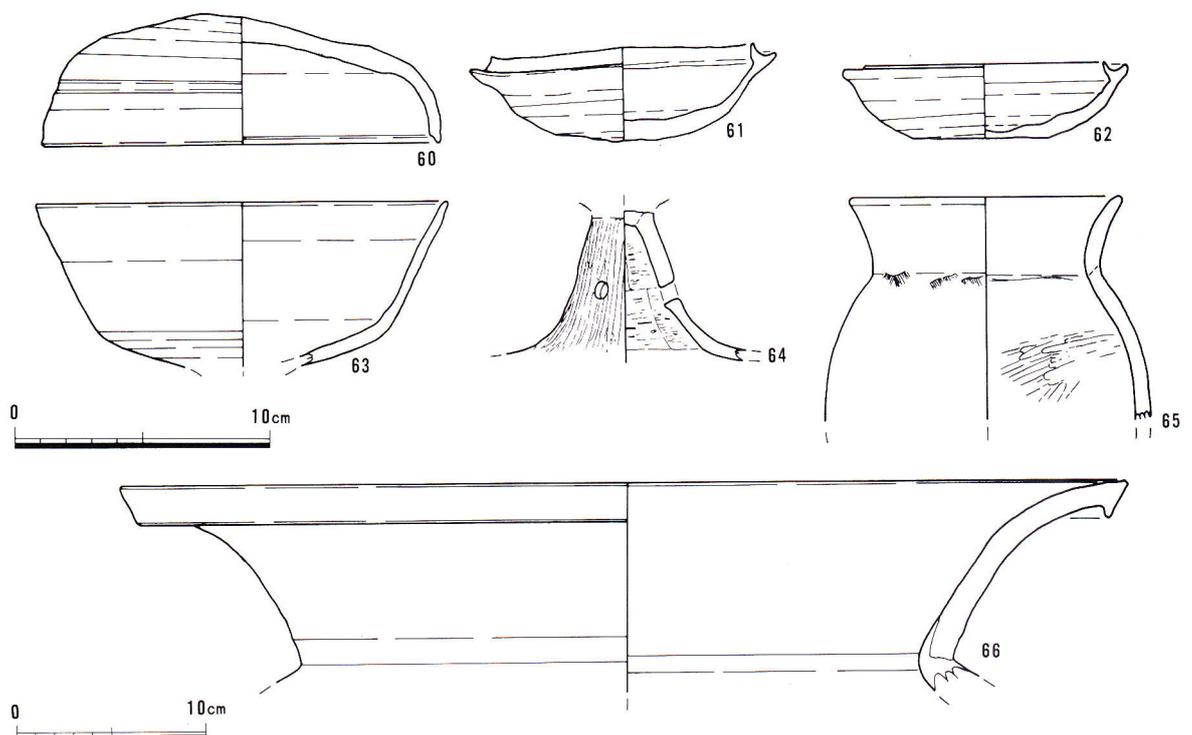
これらの遺物は、須恵器からTK209型式に比定でき、6世紀末頃の所産と考えられる一括資料である。

[包含層出土の遺物](第21図、60～66)

60～62は須恵器の蓋杯である。60は、杯蓋で口径15.4cm、器高5.1cmを測る。外面肩部にヘラ描きによる沈線を1条施す。また口縁端部内面には、段を有する。61は、口径10.3cm、器高3.8cmを測る杯身である。この杯身は焼成時における焼き歪みが著しい。外面底部は、ヘラケズリ調整ののち受けたとみられる植物繊維の圧痕が観察できる。62は、口径9.3cm、器高3.0cmを測る杯身である。外面にはヘラケズリ調整とマキアゲ、ミズビキによる成形がみられ、底部接地面においてヘラケズリ調整ののち丁寧に指でナデ消している。66は口径52.5cmを測る須恵器の大甕である。口縁部はマキアゲ、ミズビキによる成形で、口縁部と体部接合面を強化するために口縁部の上端面には平行タタキ状の刻み目が入れている。

63～65は、土師器である。63は高杯杯部で、口径16.2cmを測る。外面下半部には回転ヘラケズリ調整が、また口縁部にはミズビキ成形がみられることから須恵器技法が用いられていることがいえる。64は、高杯脚部で3ヶ所に円形の透かし孔を有する。外面にはヘラミガキ調整が施され、また内面には板状工具によるとみられるケズリ調整が施されたのち指ナデにより消されている。65は、外面が赤褐色、内面が暗赤褐色を呈する甕である。口径は、10.6cmを測り、胎土中には石英・長石・結晶片岩・赤色軟質粒を含む。また外面にはタテハケ調整、内面にはヘラミガキ調整が施されている。

なお、62・65・66は第3層から、60・61・63・64は第4層から出土した遺物である。



第21図 遺物実測図 8

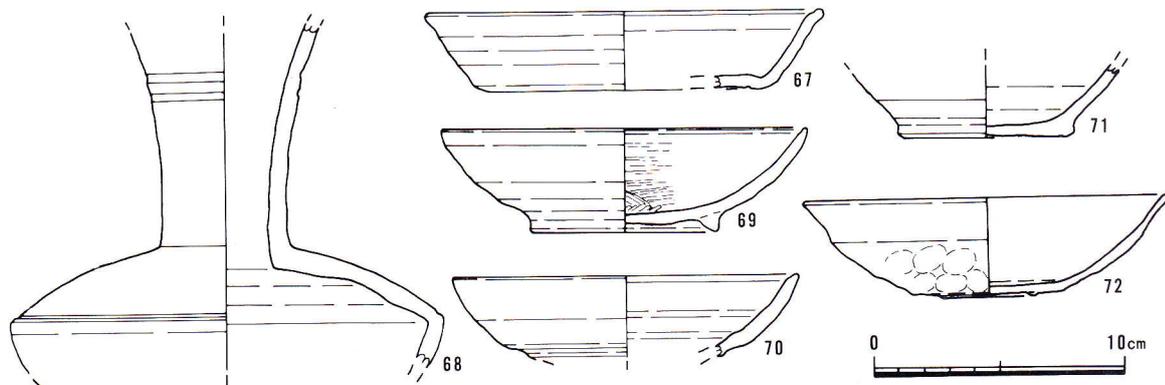
### (3) 奈良時代から鎌倉時代の遺物 (第22図、67~72)

奈良時代から鎌倉時代の遺物について、奈良時代のものは土師器杯、須恵器長頸壺、平安時代は黒色土器碗、土師器高台付皿、須恵器碗、鎌倉時代は瓦器碗などが包含層を中心に出土した。

奈良時代の遺物は土師器杯(67)、須恵器長頸壺(68)がある。67は口径16.0cm、器高3.1cm、底径10.8cmを測る暗赤褐色の土師器杯である。器形の特徴から8世紀中頃のものと考えられる。68は口縁部と底部を欠くが、体部最大径17.2cm、頸部径5.2cm、残存高13.7cmを測る淡灰色の須恵器長頸壺である。口縁部外面上半部に幅3mmの沈線を2条、肩部の体部最大径付近に沈線を1条施すものである。

平安時代の遺物は黒色土器碗(69)、土師器高台付皿(70)、須恵器碗(71)がある。69は口径14.5cm、器高4.1cm、高台径7.2cmを測る内面黒色の黒色土器碗である。内底面にジグザグ状、内側面に平行線の暗文を施す。70は口径13.8cm、残存高3.3cmを測る淡茶褐色の土師器高台付皿である。体部下半部には回転台成形時のヨコナデによる段がみられる。71は底部径6.6cm、残存高2.9cmを測る須恵器碗である。外底面に回転ヘラ切り痕がわずかに認められる。内底面には焼成時のいわゆる「火櫛」状のものがみられる。

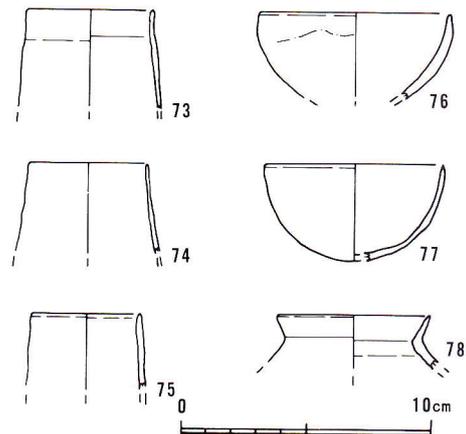
鎌倉時代の遺物は瓦器碗(72)がある。口径14.4cm、器高4.0cm、高台径3.6cmを測る。磨滅の為に淡灰色であり、高台は粘土紐を貼り付けた簡単なものがつく。口径の割に器高が低いものである。



第22図 遺物実測図 9

### (4) 製塩土器 (第23図、73~78)

製塩土器は器壁が2~3mmと薄く、口径4~5cmで体部が直立、もしくは少し内傾するもの(73~75)、口径7.5cm程度、器高4.0cm弱で半球形のもの(76・77)、口縁部が断面形「く」字状に外反する壺形のもの(78)の3タイプが出土した。73~77は磨滅により図化できなかったが、内面に横方向の貝殻条痕を観察することができた。胎土はいずれも緻密で、明赤褐色から淡茶褐色に発色するものであり、すべて丸底のものであると考えられる。

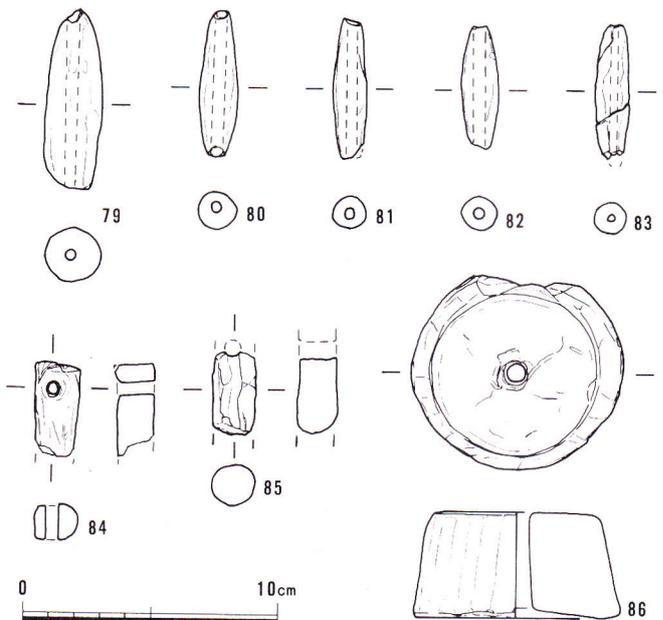


第23図 遺物実測図10

(5) 土製品 (第24図、79~86)

土製品では土錘が7点、不明土製品が1点図化できた。79~83は両端の細くなる円筒形を呈する管状土錘であり、棒状のものに粘土を巻き付けて製作されたと思われる。重量は79から30.9g・9.7g・7.1g・7.4g・7.6gを測る。84・85は有孔土錘である。84の断面は、長径1.8cm、短径1.4cmの楕円形で、孔径5mmを測る。

86はSD-6第4層から出土した不明土製品である。上底径6.2cm・下底径8.2cm・高さ4.2cmの円錐台形を呈しており、中心部に直径1cmの孔をもつ。重さは330gを測り、側面は面取りが施されている。巨大な紡錘車の可能性が考えられる。

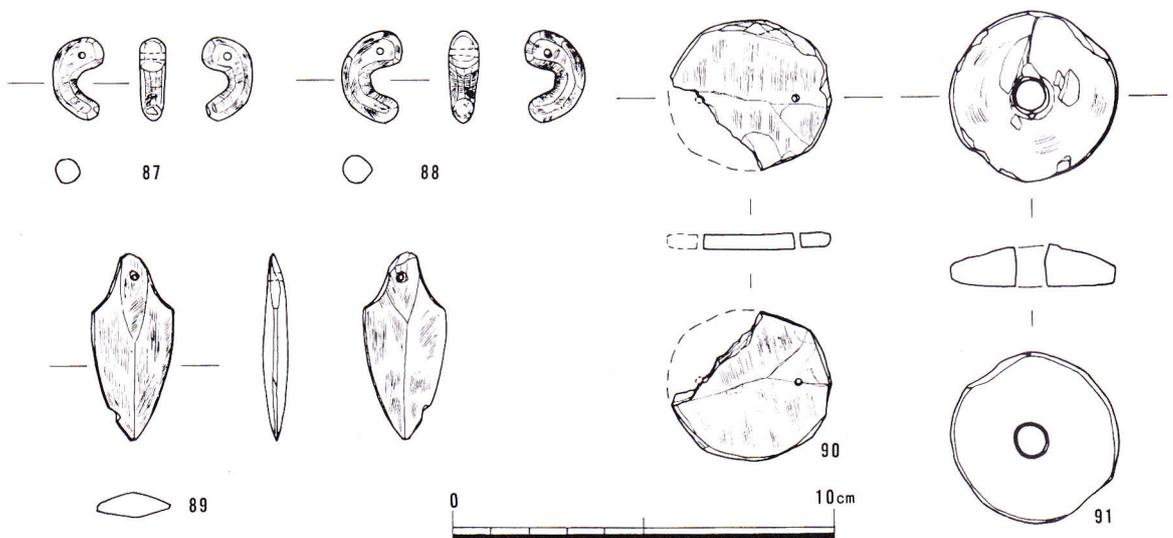


第24図 遺物実測図11

(6) 石製品 (第25図、87~91)

87・88は滑石製勾玉である。両者とも丁寧に研磨を施している。87は長さ2.2cm、重さ2.5gを量る。また88は長さ2.4cm、重さ3.4gを量る。89は滑石製剣形模造品である。両面とも明瞭な研磨を施し、丁寧な造りのもので重さ7.4gを量る。90は緑色片岩製の有孔円板である。一部を欠失しているが、ほぼ円形のものともみられる。長径4.2cm、短径4.0cm、厚み0.4cmを測り、重さは11.25gである。これらはSD-6第4層の一括出土資料であり、装飾品として祭祀に用いられたものと考えられる。

91はSX-1から出土した滑石製紡錘車である。この紡錘車はやや扁平な円錐形であり、中央に径8mm大の円孔を丁寧にあけている。また重さは30.5gを量る。

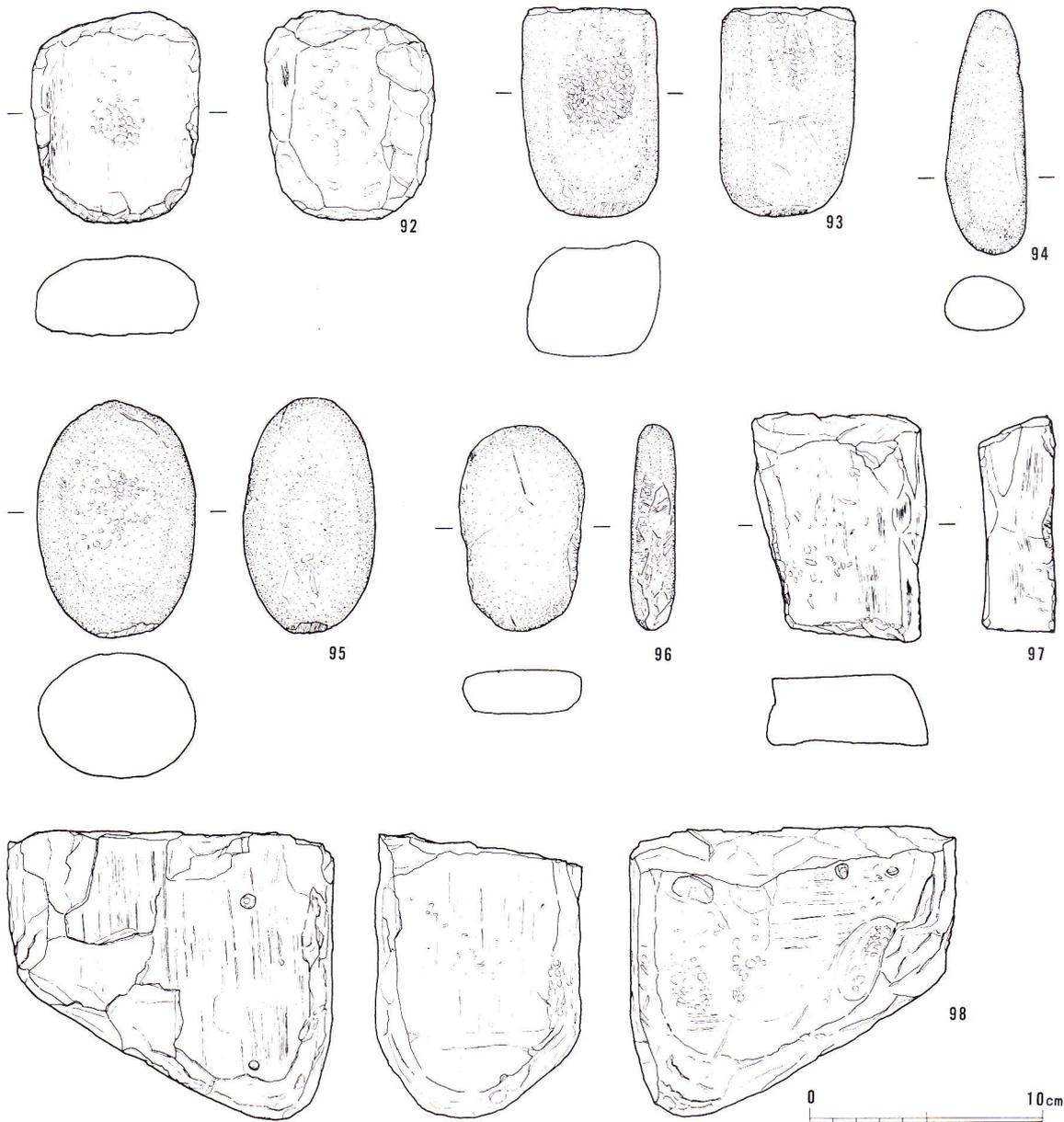


第25図 遺物実測図12

(7) 石器 (第26図、92~98)

92・94・95はSD-6第3層、93・96は包含層出土の叩き石である。92は緑色片岩製の磨製石斧を転用したもので、敲打痕は主に刃部と表面にみられ、重量は420gを測る。93~96は砂岩製であり、特に93の表面には敲打痕が顕著にみられる。96は表面、裏面がやや平滑であり、砥石としての役割も考えられる。重量はそれぞれ430g・100g・500g・140gを測る。

97・98は共に砂岩製の砥石で、97はSD-6第3層、98はSD-7出土遺物である。97は表面、側面において使い込まれており、光沢を帯びている。98はほぼ全ての面が平滑であるが、特に側面は光沢を帯びており主要な使用面であったと思われる。また表面、裏面共に円形の回転運動による窪みが数カ所みられ、顕著なものでは直径7mm、深さ4mmを測る。砥石の他にも作業台としての役割があったと思われる。



第26図 遺物実測図13

## 6. まとめ

### (1) 友田町遺跡における古墳時代遺構の変遷について

まず友田町遺跡は調査の契機と経過で述べた通り吉田窯跡（遺跡番号328）とされていた遺跡が、当調査地の約100m西側に位置する第1次調査（平成6年度）において窯跡とは別の古墳時代後期の遺構が検出されたことにより、新発見の遺跡として周知されたものである。この第1次発掘調査地点は古墳時代後期の溝や土坑状の遺構が検出されている。

今回の調査においても主体となる遺構は古墳時代のものであった。検出した主要な古墳時代の遺構は、前期の竪穴住居や平行して走る溝、中期の土器廃棄土坑や井戸、後期の掘立柱建物や溝などである。これらの遺構は、ほぼ調査区全体において検出し、良好な成果を得た。

この古墳時代の遺構の変遷は、第27図に示した通りである。

まず古墳時代前期ではD区において検出した竪穴住居とみられるSB-1がある。またA区からC区にかけて検出した溝SD-2やD区からA区にかけて検出した溝SD-20があり、これらは幅約20mの間隔をもって平行して走る。また調査区北端において大きく弧をえがくことから集落等を区画する溝の可能性が考えられる。SB-1はこの2条の溝の間で検出したものである。

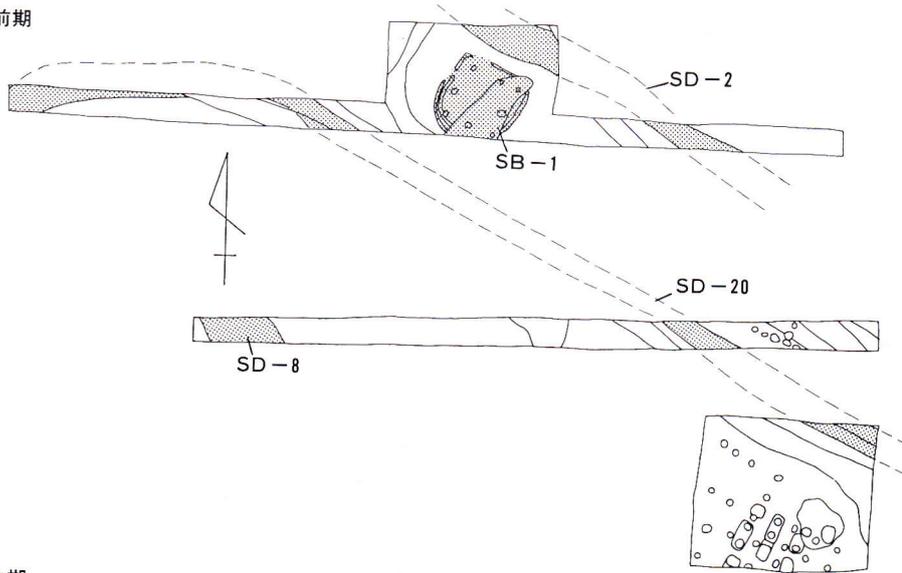
この時期の遺物は全体的に希薄であり、SD-2から少量出土したのみである。この遺物から布留併行期の新段階に位置づけられ、古墳時代前期でも後半であることがわかる。このことから、集落の形成期もしくは縁辺部に相当するものと考えられる。

次に、古墳時代中期ではA区において検出した土器廃棄土坑SK-2やD区において検出したSE-1などがある。これらの時期は須恵器からTK47型式に比定でき、5世紀末から6世紀初頭頃とみられ、古墳時代中期でも中葉から後葉に位置づけられる。さらに、SD-6の古段階が6世紀前半に考えられることからこの時期に前期のSD-2を踏襲する溝が掘削されたものとみられる。この時期は検出した遺構の数が希薄であるが、同遺構内から一定量の遺物が出土し、また新しい時期の遺構内からも遺物が検出されている。このことから、周辺には住居等の生活遺構が存在するとみられ、前期以上に集落が拡大していると考えられる。

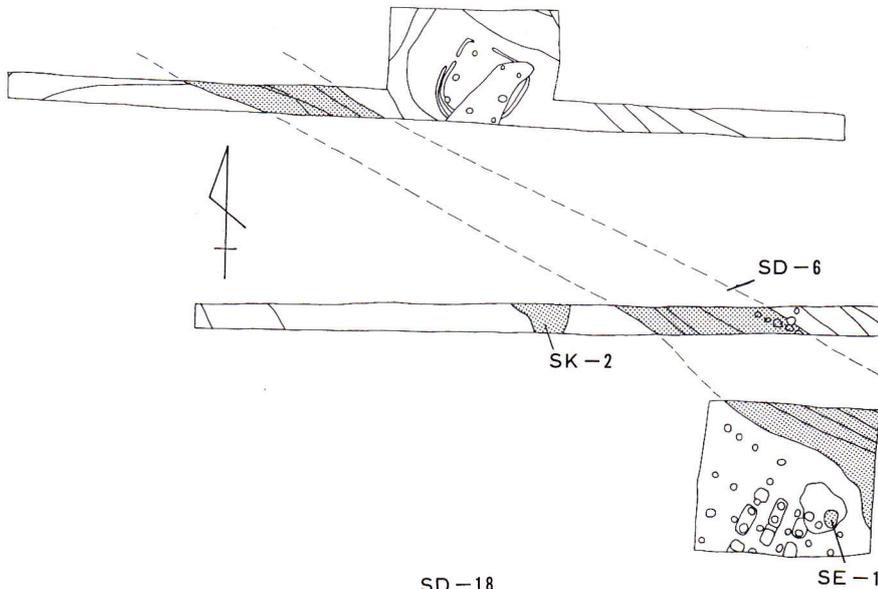
古墳時代後期ではD区において検出した掘立柱建物群やD区からA区にかけて検出した溝SD-7など多くの遺構を検出している。検出した溝の方向性は、SD-7から前期の溝の方向性を踏襲しているものとみられる。また掘立柱建物群は溝の主軸とほぼ平行関係にあることから溝を基準として建物が構成されるものとみられる。掘立柱建物には布掘り状のホリカタをもつ総柱の規模の大きいものがあることから倉庫的なものであったことが窺える。これらの遺構の時期は須恵器よりTK43型式併行期からTK217型式併行期にかけてのものが多いが、MT15型式併行期から増加する傾向がみられる。このことから、6世紀に入り、さらに集落が拡大し、6世紀後半に盛期をむかえる状況が窺える。

古墳時代以降の状況は、7世紀中葉には既にSD-6が埋没し、奈良時代の遺物を含む第4層が堆積することから、奈良時代にこの集落は終焉をむかえたものとみられる。

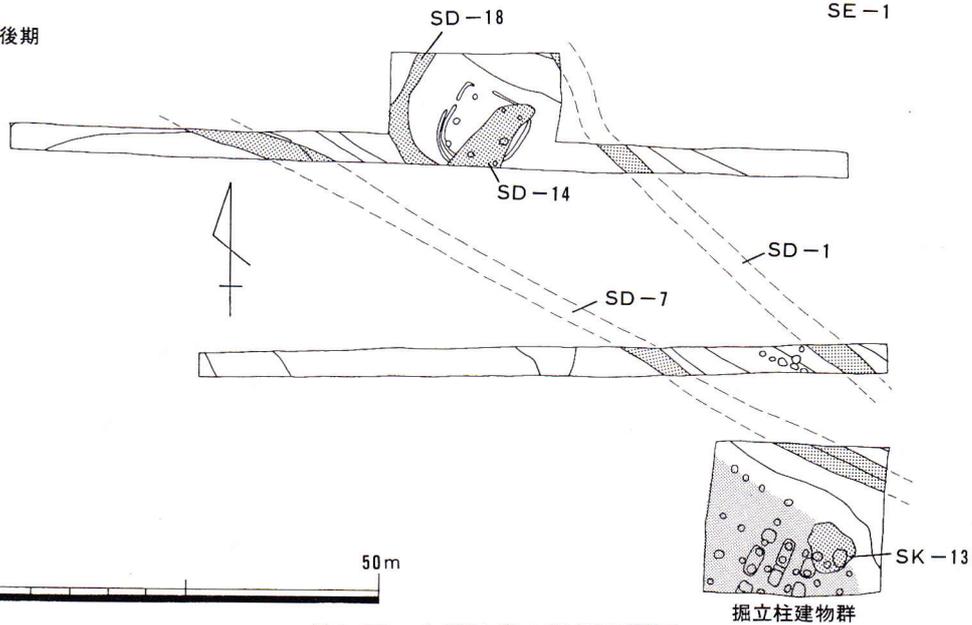
古墳時代前期



古墳時代中期



古墳時代後期



第27図 古墳時代の遺構変遷図

## (2) 掘立柱建物群について

今回の調査において、掘立柱建物をD区において5棟検出した。またD区SD-6南側の微高地上には狭小な範囲ながら100個にも及ぶ柱穴を検出した。このほか、B区東端のやや微高地上においても比較的大きなホリカタをもつ柱穴を検出した。これらの柱穴は、そのほとんどが古墳時代の掘立柱建物に伴うものと考えられることから、かなりの数の掘立柱建物が存在したものとみられる。この掘立柱建物群の時期は、その柱穴ホリカタから出土した須恵器からTK209型式併行期からTK217型式古段階併行期にかけてのものが多く、6世紀後半から7世紀前半の時期に存在したものとみられ、D区で集中して検出した柱穴の重なりから少なくとも3時期以上の掘立柱建物が存在した可能性がある。

なかでも、最も時期が遡るSB-5は、梁行2間(3.5m)、桁行3間(3.7m)以上を測る総柱の掘立柱建物である。この建物の柱穴ホリカタは先述した通り、いわゆる布掘り状のホリカタを掘削した後、丁寧に埋め戻しを行い、さらに60~100cmを測る隅円方形のホリカタを掘削し、柱を据えるものであり、特殊な構造をしている。また、柱芯においても直径25~30cmを測り、他の建物に比べ柱の規模が大きいといえる。

このような布掘り状の柱穴ホリカタをもつ古墳時代の掘立柱建物では、県内において鳴滝遺跡(第2図、9)が特に著名である。この遺跡では5世紀代の大型の掘立柱建物を7棟検出し、これらはすべて倉庫群とみられている<sup>(1)</sup>。当遺跡検出のSB-5は、この掘立柱建物の系譜をひく可能性があり、今回の調査区を含む南側は古墳時代に掘立柱建物が多く建てられた注目すべき地域であるといえる。

## (3) 友田町遺跡出土の祭祀関係遺物について

SD-6第4層から一括出土した祭祀関係遺物とみられるものに滑石製勾玉2点、滑石製剣形模造品1点、緑色片岩製の有孔円板1点がある。これらの遺物は6世紀の前半から中頃にかけてのものと思われる。またSD-6以外ではSX-1から滑石製紡錘車1点が出土している。

周辺の遺跡からその分布をみると、まず滑石製勾玉では当遺跡東側約2kmに位置する鳴神遺跡群において滑石製白玉とともに比較的多く出土している。この滑石製勾玉の多くは厚みが薄く、いわゆる模造品とされるものである。また同遺跡群内からは滑石製有孔円板や滑石製紡錘車、碧玉製管玉なども数点出土している。

また滑石製剣形模造品では今回出土したものが和歌山市内では初例のもので、県内をみると御坊市の富安I遺跡に1点、西牟婁郡白浜町の坂田山遺跡に3点、同郡串本町の向屋敷遺跡に2点の出土例がある。これらの剣形模造品も研磨は施されているものの今回の剣形模造品のように整った形での出土はなく、本例が最も良好な資料といえる。

次に、以上の滑石製模造品が出土する時期では、勾玉は5世紀代の遺跡に多く、有孔円板は4世紀から6世紀代までみられ、5世紀中葉から後半の資料が多いと考えられている<sup>(2)</sup>。

これらの遺物分布から、剣形模造品は御坊市以南の紀南地域に分布し、紡錘車は紀ノ川河口平野周辺の紀北地域の遺跡に分布すると考えられていた<sup>(3)</sup>。今回の友田町遺跡の調査により剣形模造品が出土したことは紀北地域においてもその分布が広がる様相を考える一つの貴重な資料といえる。また時期的には他の遺跡に比べてやや新しい時期の資料ともいえよう。

註記

- (1) 和歌山県教育委員会 『鳴滝遺跡発掘調査報告書』 1984
- (2) 前田敬彦 第2回東日本埋蔵文化財研究会シンポジウム資料「和歌山県の概要」『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』第III分冊 1993年
- (3) 註2文献と同じ

【参考文献】

- 和歌山県史編さん委員会 『和歌山県史』 和歌山県 考古史料 1983年  
和歌山市史編さん委員会 『和歌山市史』 第1巻 和歌山市 1991年  
和歌山県教育委員会 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 1984年  
『鳴神V遺跡発掘調査概要報告書』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1994年  
『鳴神IV跡第6次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1995年  
『府中IV遺跡第2次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1996年  
「8. 友田町遺跡発掘調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報4』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1997年  
佐原真 『弥生土器I』 ニューサイエンス社 1983年  
寺沢薫・森岡秀人 『弥生土器の様式と編年』 近畿編I 木耳社 1989年  
田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981年  
中村浩 『和泉陶器窯の研究』 柏書房 1981年  
第2回東日本埋蔵文化財研究会シンポジウム資料 『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』 第III分冊 1993年

## 報 告 書 抄 録

| ふりがな                   | ともだちょういせきだい2・3じはくつちょうさがいほう                       |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
|------------------------|--|--------------|------|-----------------------|--------------------|--|-------------|---------------------------------|
| 書名                     | 友田町遺跡 第2・3次発掘調査概報                                |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| 副書名                    |  |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| 巻次                     |  |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| シリーズ名                  | 和歌山市文化体育振興事業団調査報告書                               |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| シリーズ番号                 | 第18集   |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| 編著者名                   | 井馬好英・北野隆亮・高橋方紀・吉田綾子                              |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| 編集機関                   | 財団法人 和歌山市文化体育振興事業団                               |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| 所在地                    | 〒640 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL0734-35-1195               |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| 発行年月日                  | 西暦 1998年3月31日                                    |              |      |                       |                    |  |             |                                 |
| ふりがな<br>所収遺跡名          | ふりがな<br>所在地                                      | コード          |      | 北緯                    | 東経                 | 調査期間   | 調査面積<br>(㎡) | 調査原因                            |
|                        |  | 市町村          | 遺跡番号 |                       |                    |  |             |                                 |
| ともだちょう<br>いせき<br>友田町遺跡 | わかやまけん<br>和歌山県<br>わかやまし<br>和歌山市<br>ともだちょう<br>友田町 | 3020150      | 406  | 34°<br>13'<br>48"     | 135°<br>11'<br>30" | 19970618～<br>19970813<br>19971105～<br>19971225 | 390         | 店舗<br>建築                        |
| 所収遺跡名                  | 種別   | 主な時代         |      | 主な遺構                  |                    | 主な遺物   |             | 特記事項                            |
| 友田町遺跡                  | 集落跡  | 古墳時代<br>鎌倉時代 |      | 竪穴住居<br>掘立柱建物<br>溝・土坑 |                    | 弥生土器<br>須恵器・土師器<br>滑石製石製品                      |             | 倉庫とみられる掘<br>立柱建物群と建物<br>に平行する溝。 |

版 圖

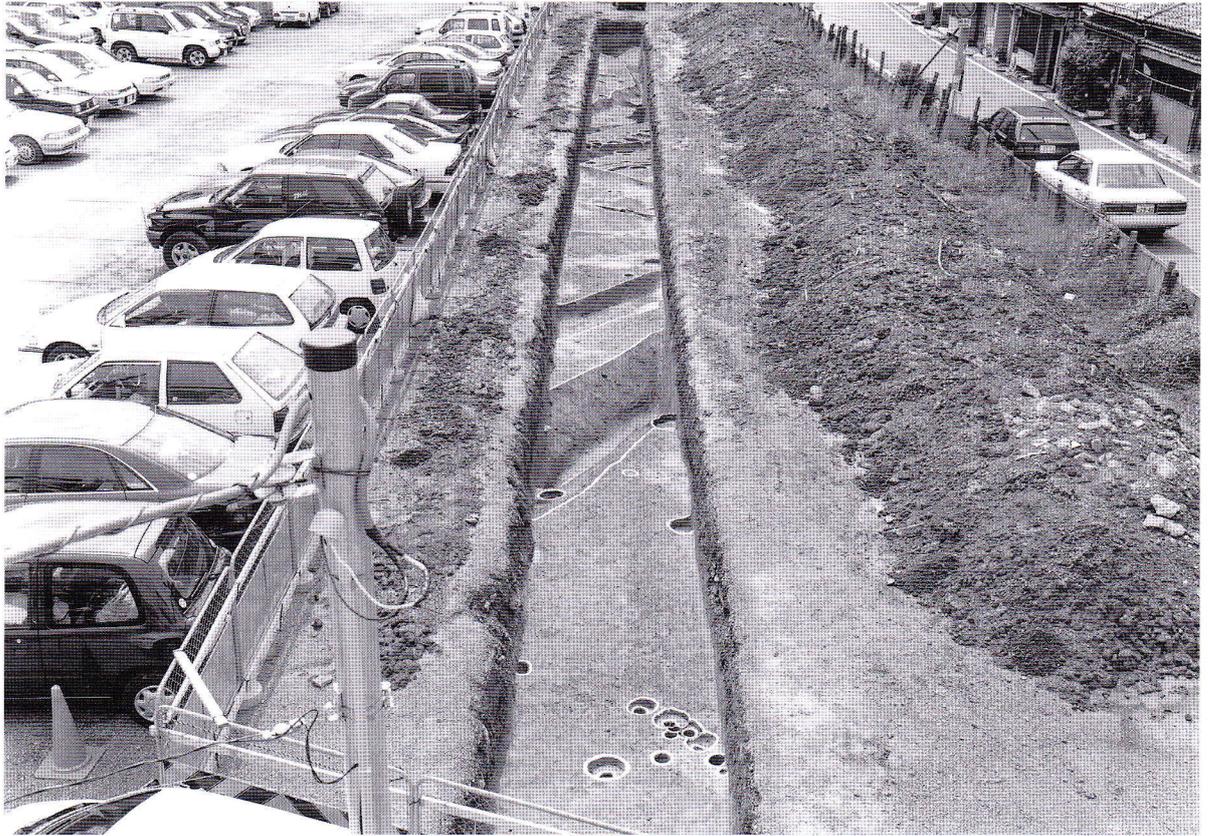


調査地遠景空撮（東から）



調査前の状況（西から）

図版 2  
第 2 次 調 査



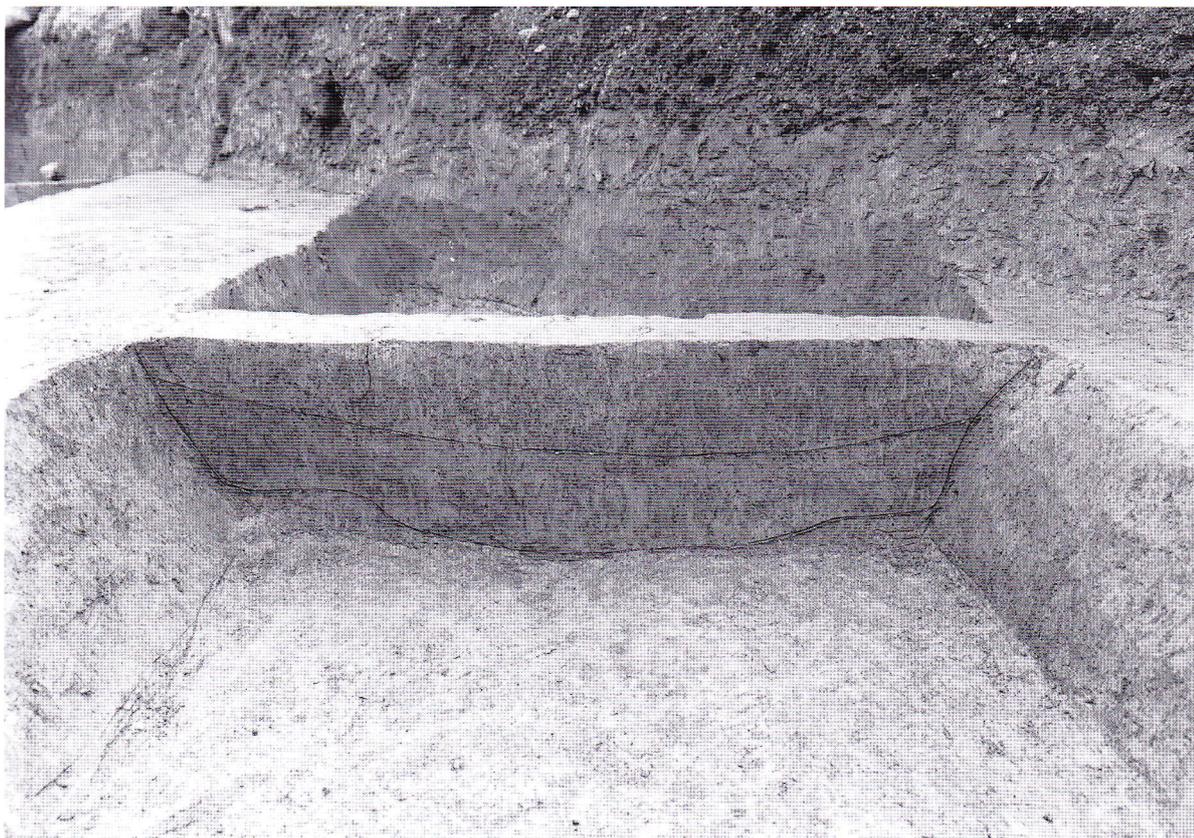
A区 全景 (東から)



A区 全景 (西から)



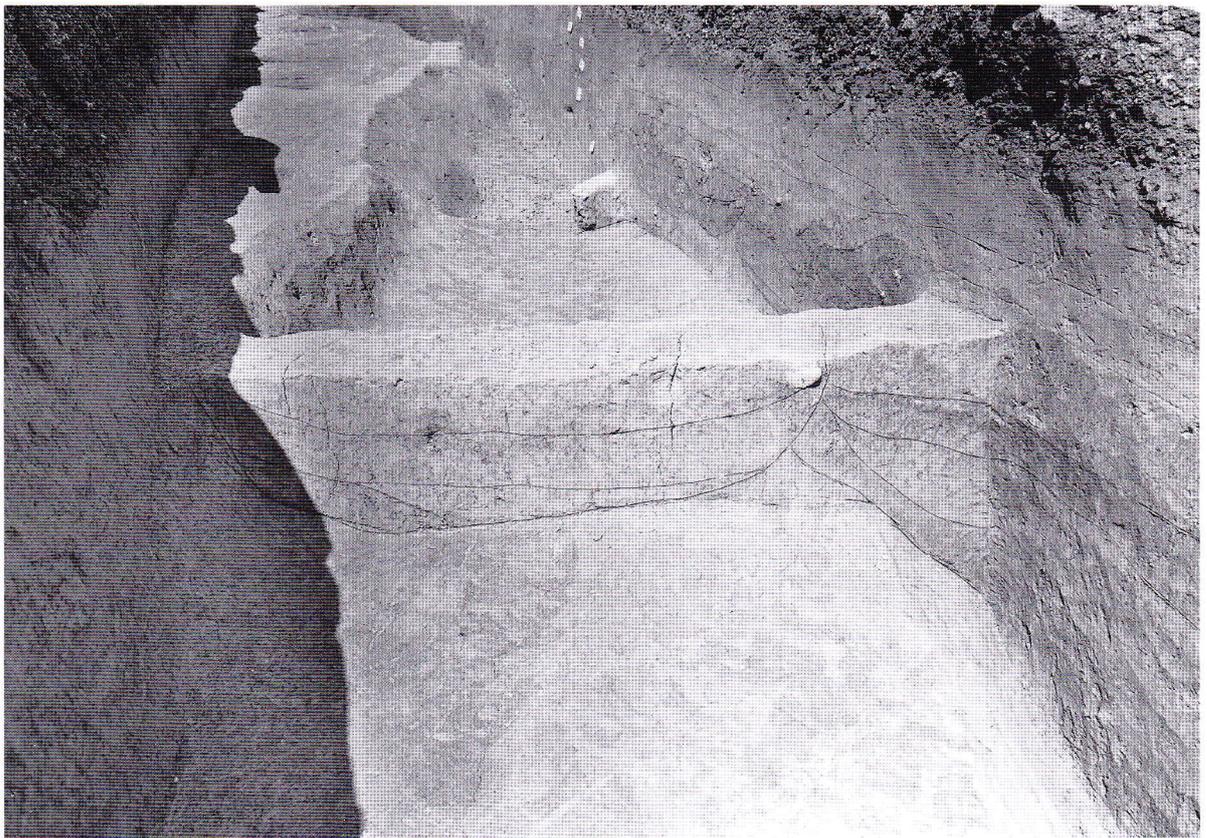
A区 SD-1 (南東から)



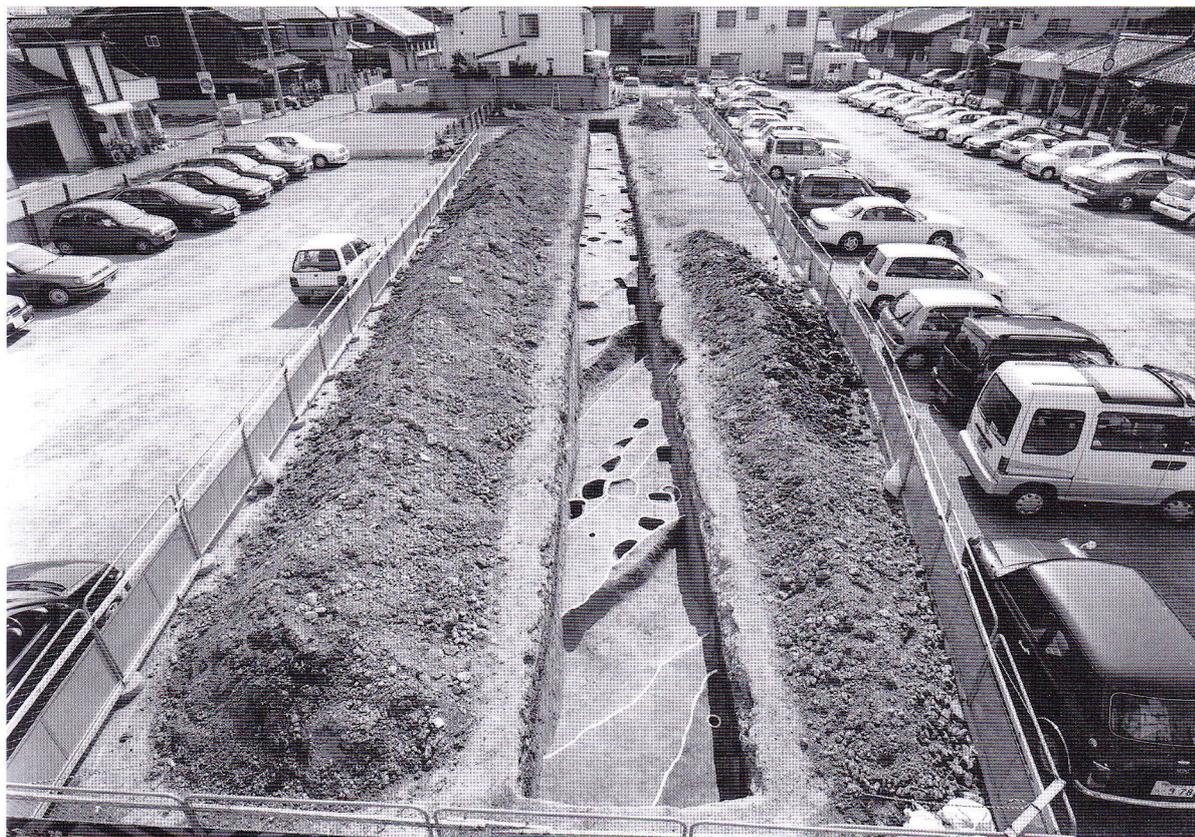
A区 SD-1土層堆積状況 (北西から)



A区 SD-6・7・20周辺 (東から)



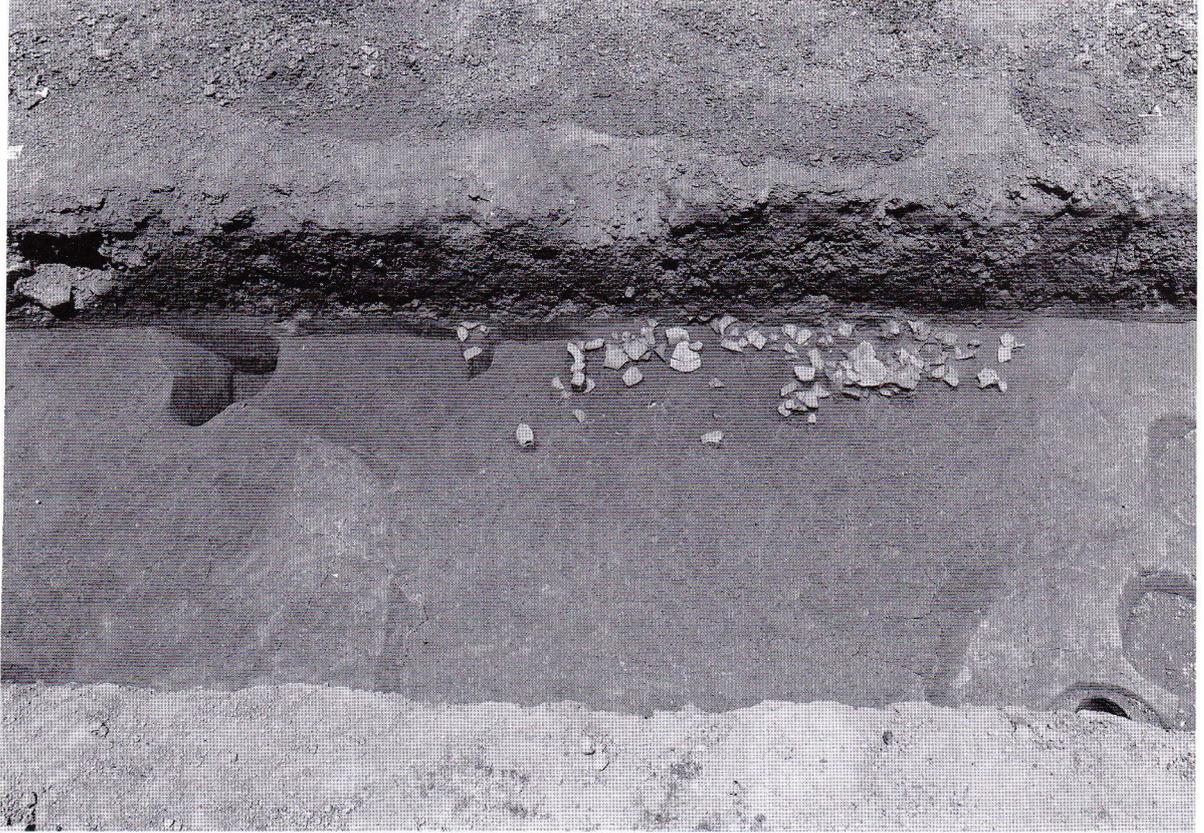
A区 SD-7・20土層堆積状況 (南東から)



B区 全景 (東から)



B区 全景 (西から)



B区 SK-2 (南から)



B区 SK-2遺物出土状況 (上が北)

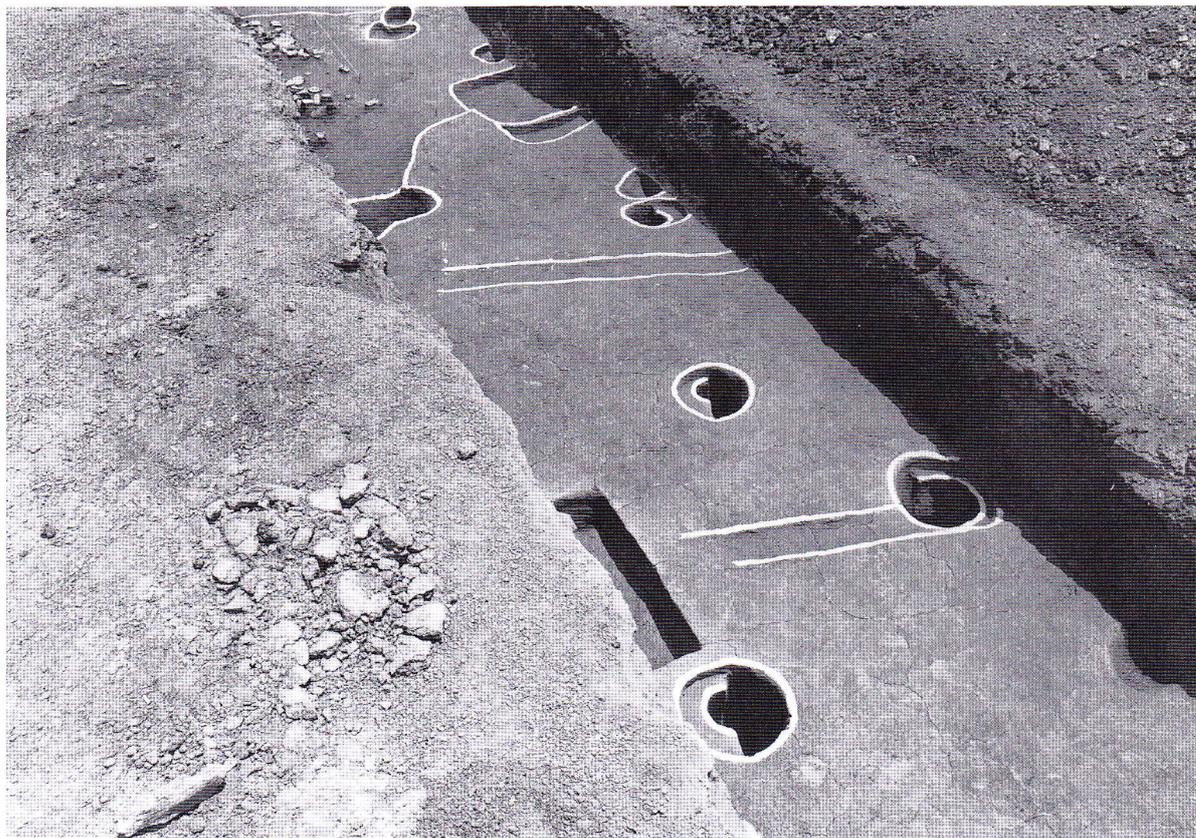


B区 SD-6・7・20周辺 (西から)



B区 SD-6・7・20 (北西から)

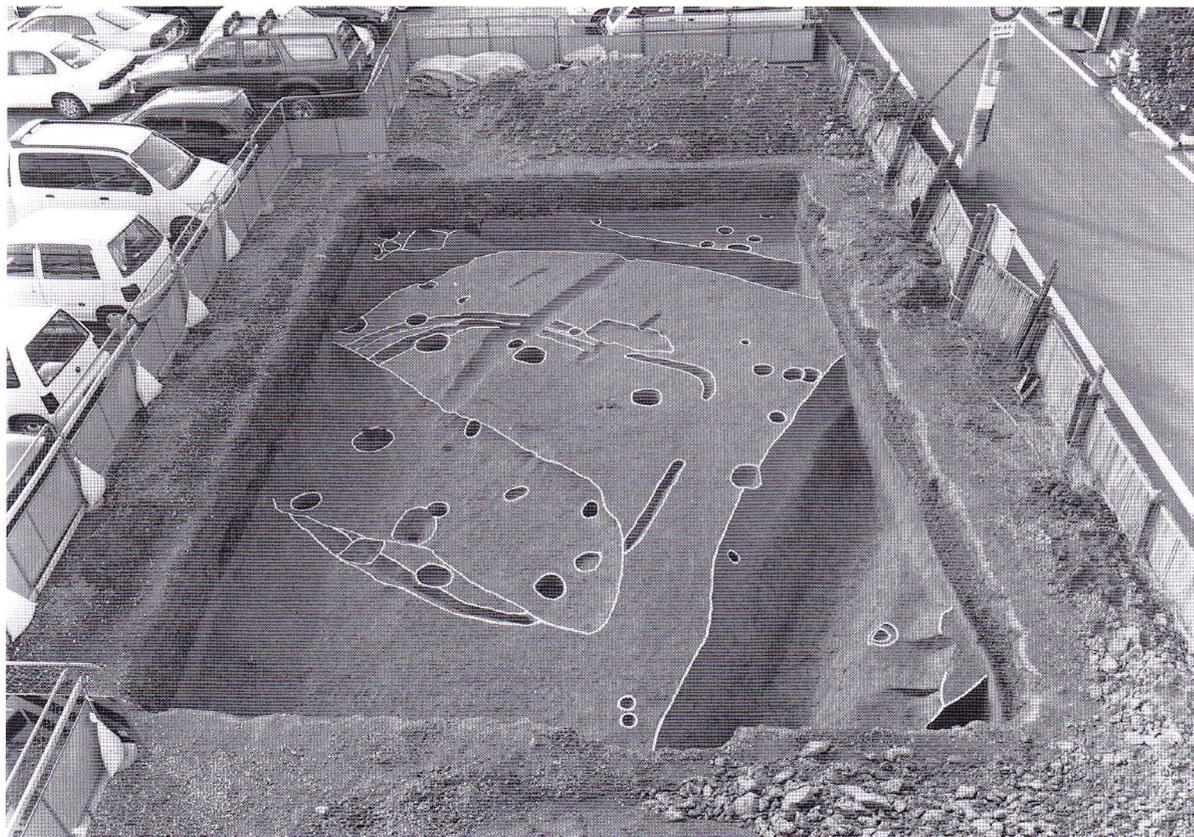
図版 8  
第2次調査



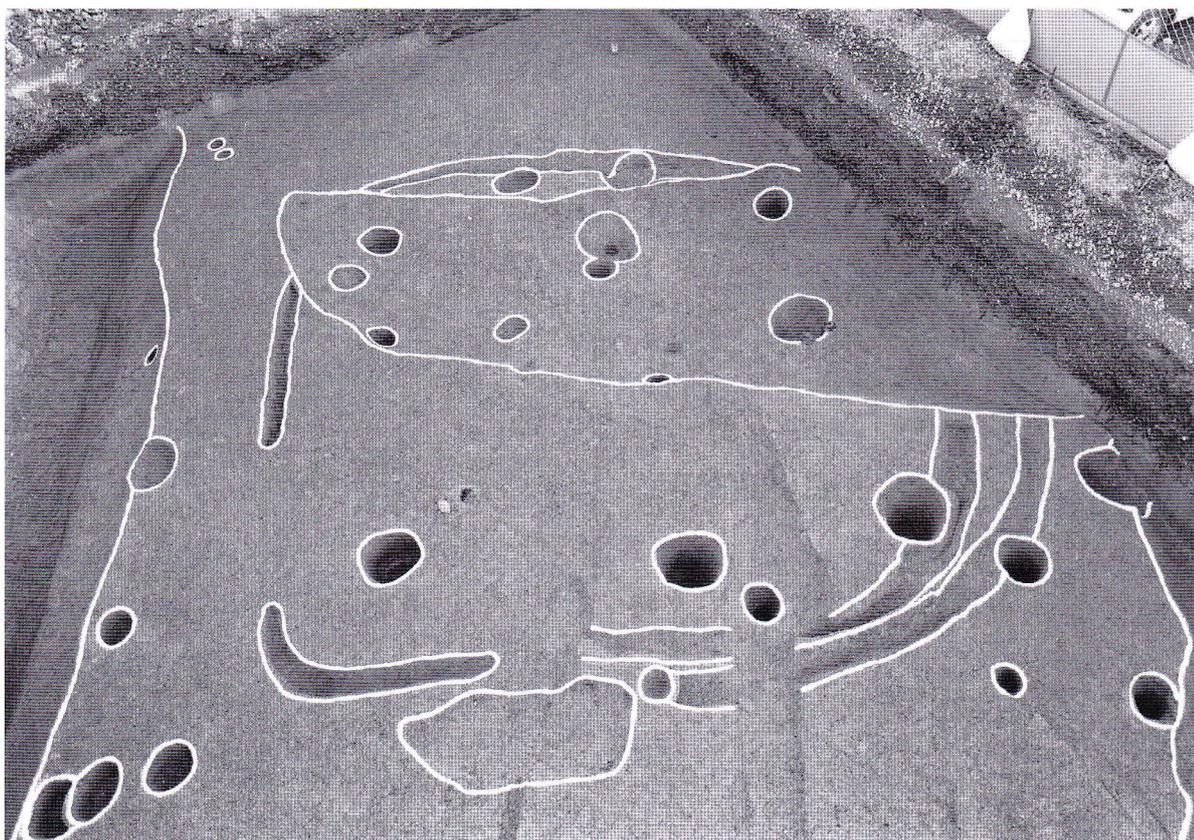
B区 SA-1 (北西から)



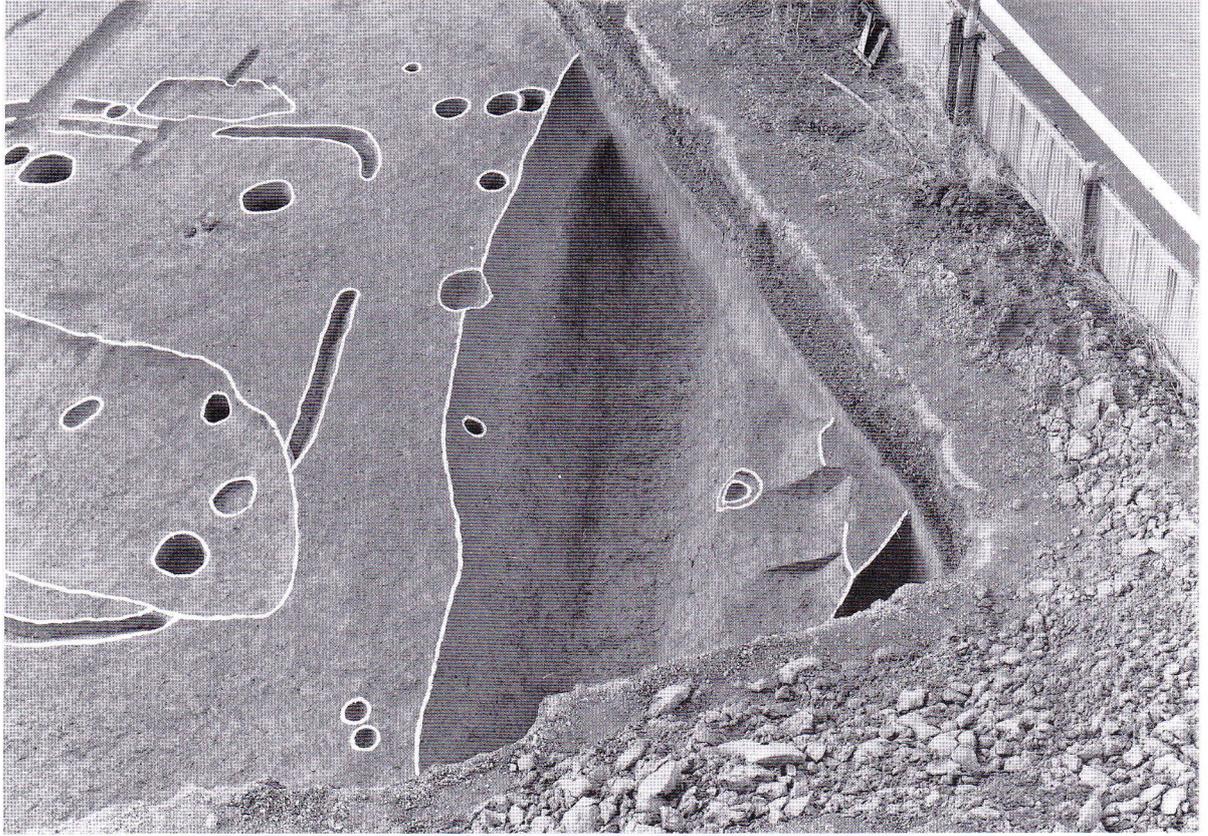
B区 西壁土層堆積状況及び噴砂検出状況 (東から)



C区 全景 (東から)



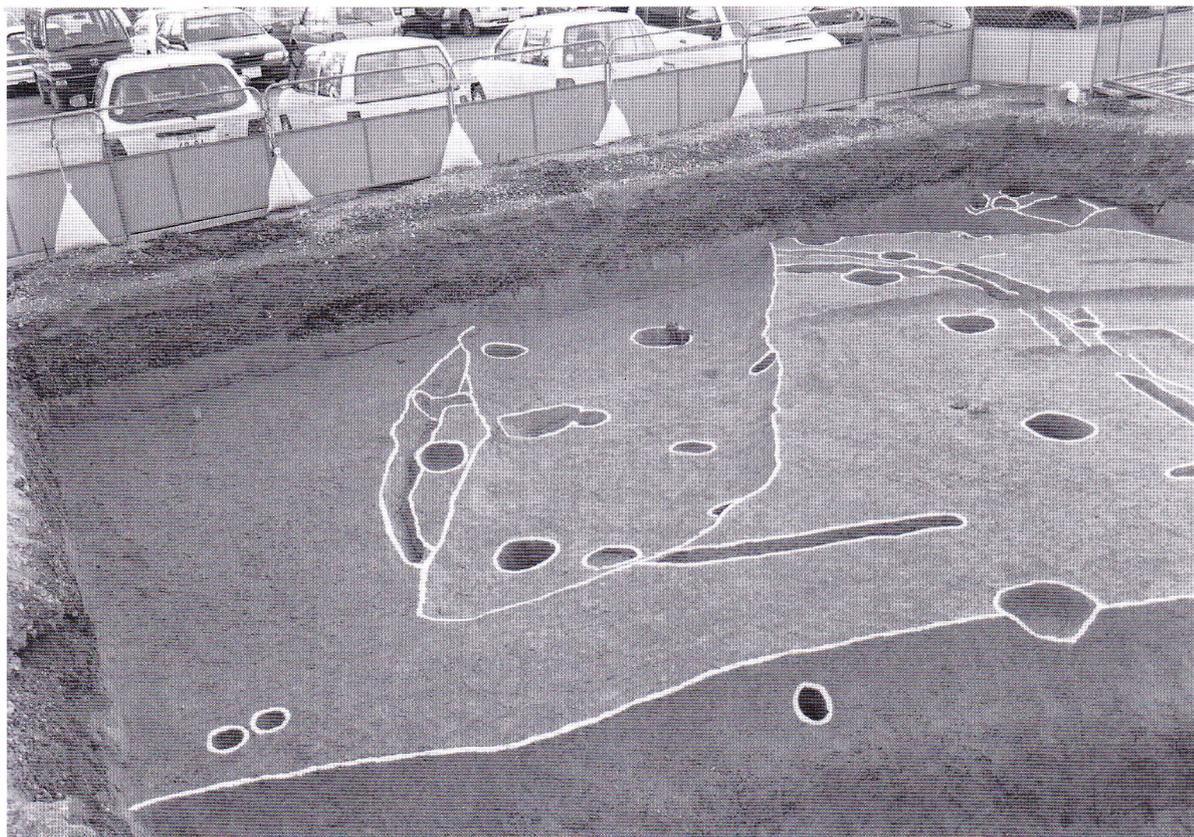
C区 SB-1 (西から)



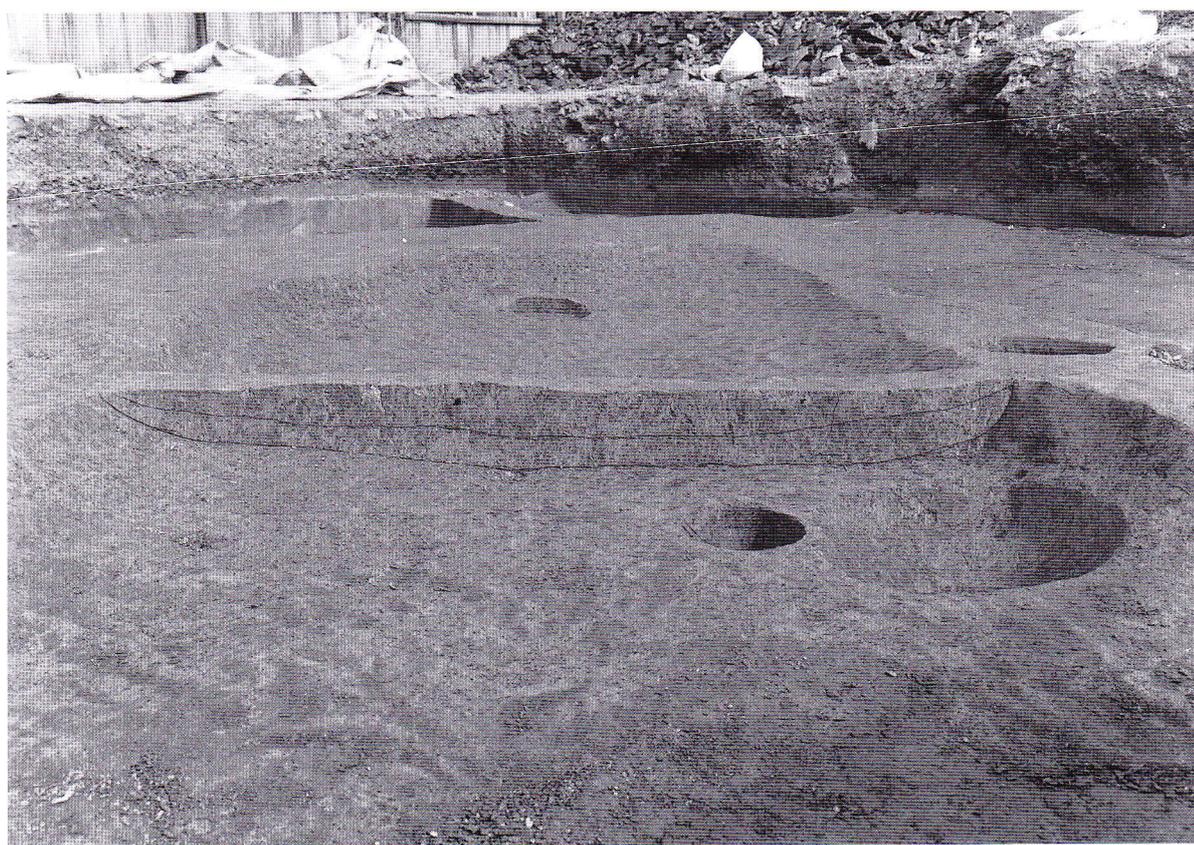
C区 SD-2 (南東から)



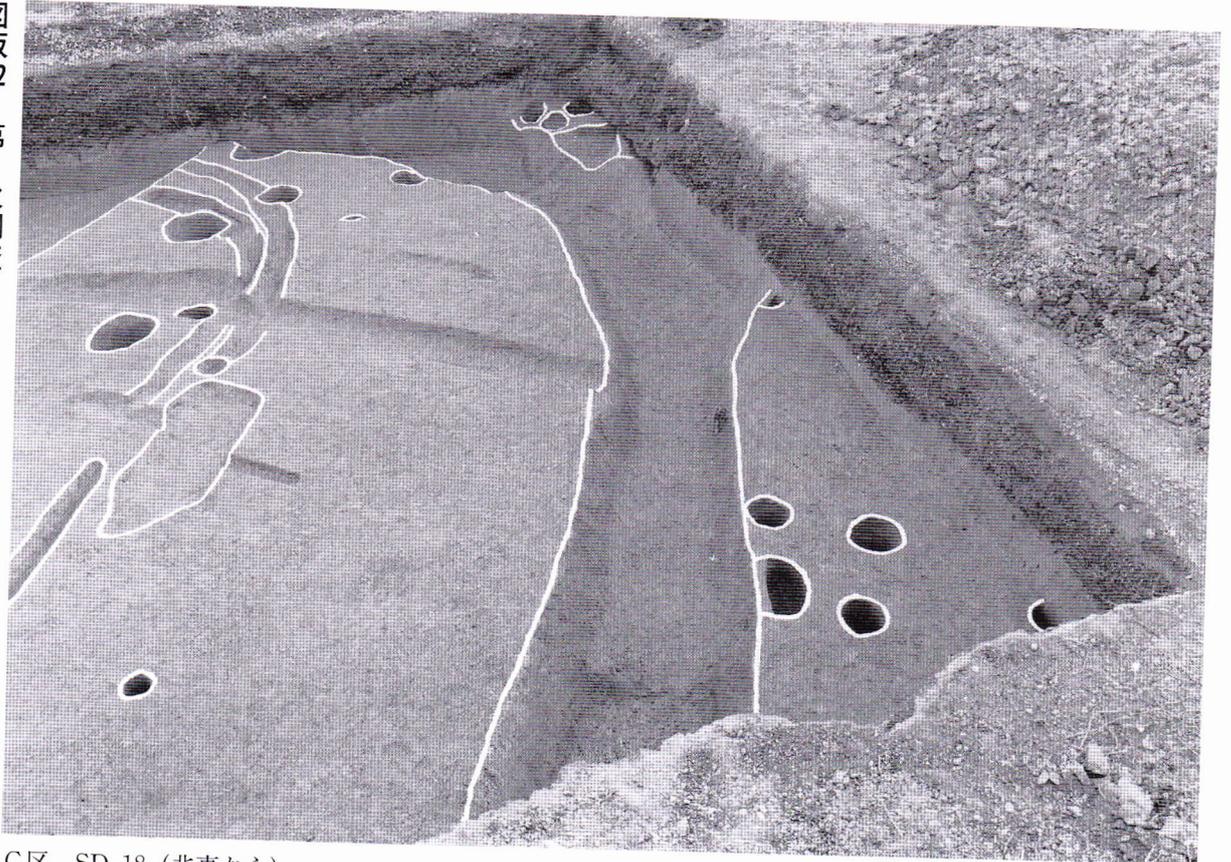
C区 SD-2土層堆積状況 (北西から)



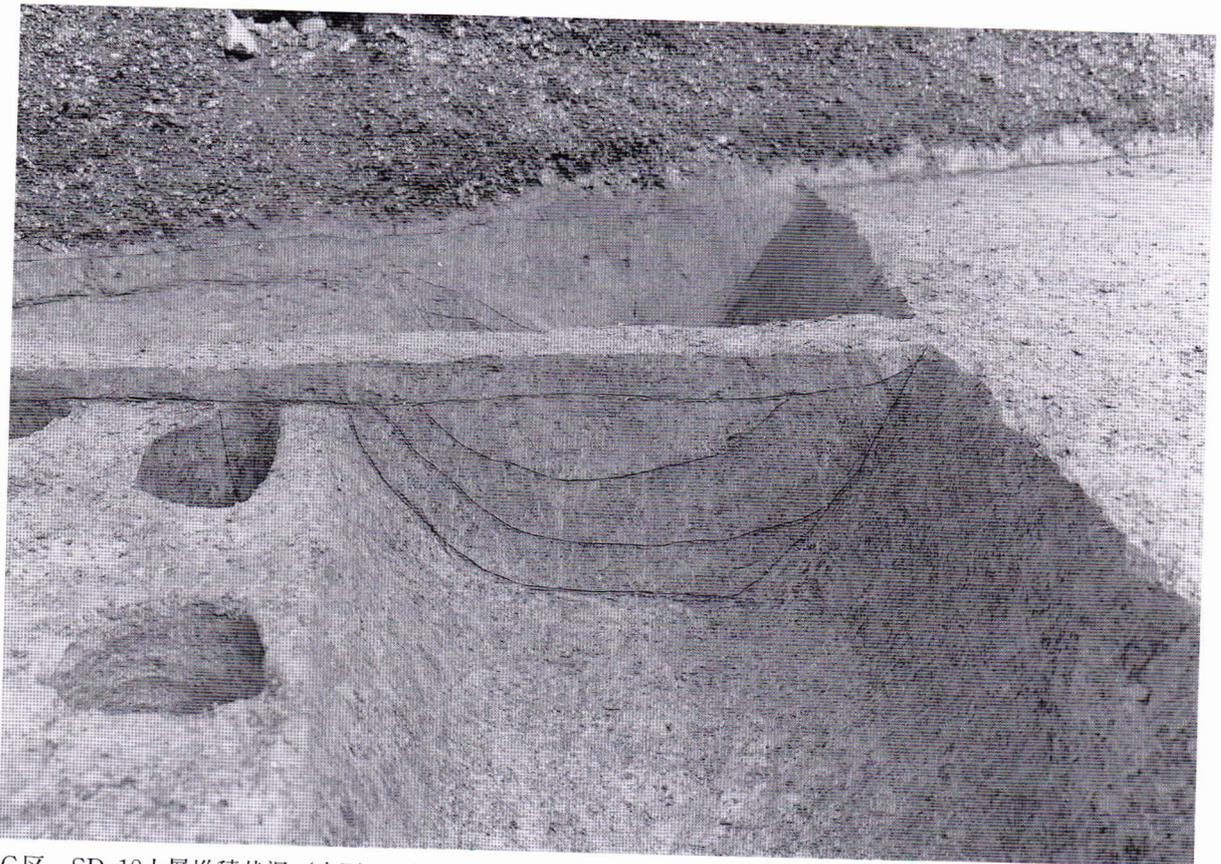
C区 SD-14 (北東から)



C区 SD-14土層堆積状況 (南西から)



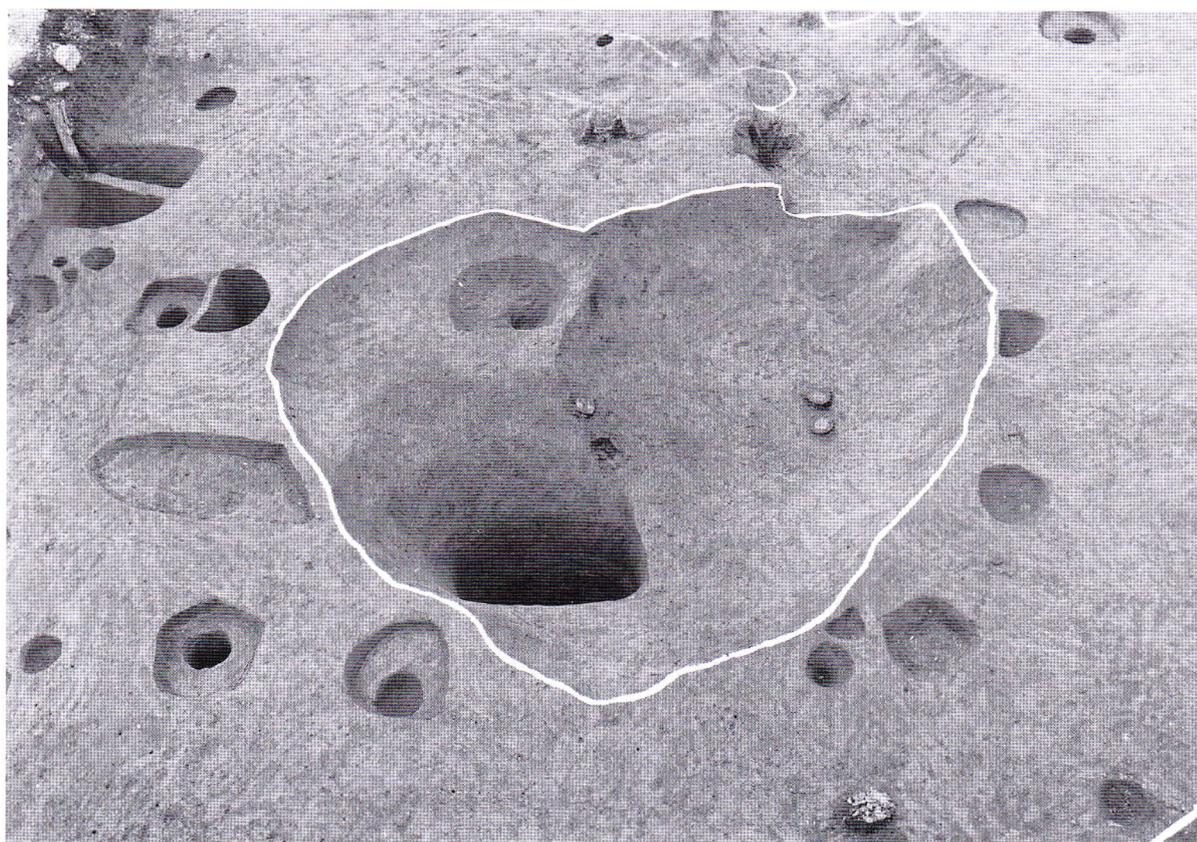
C区 SD-18 (北東から)



C区 SD-18土層堆積状況 (南西から)



D区 全景 (西から)



D区 SE-1・SK-13 (東から)



D区 SD-6・7・26 (南東から)



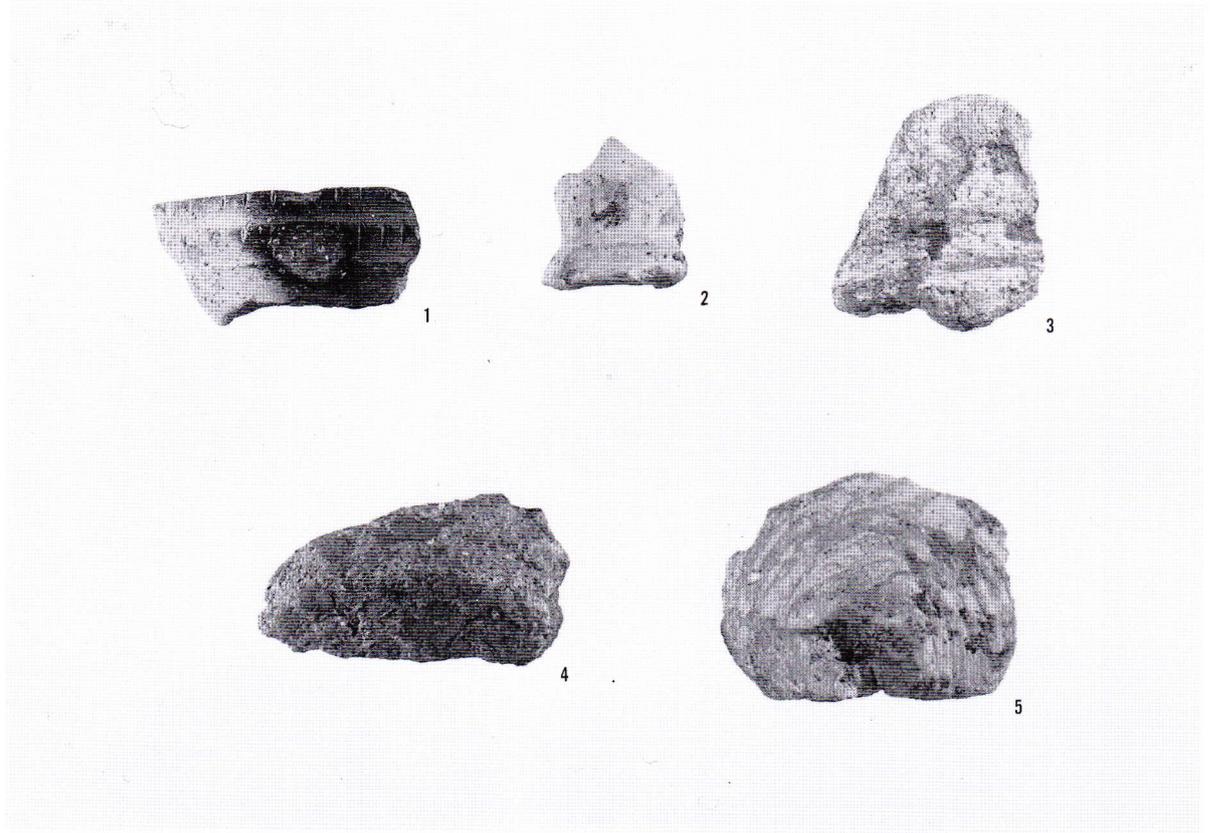
D区 SD-6・7・20・26土層堆積状況 (西から)



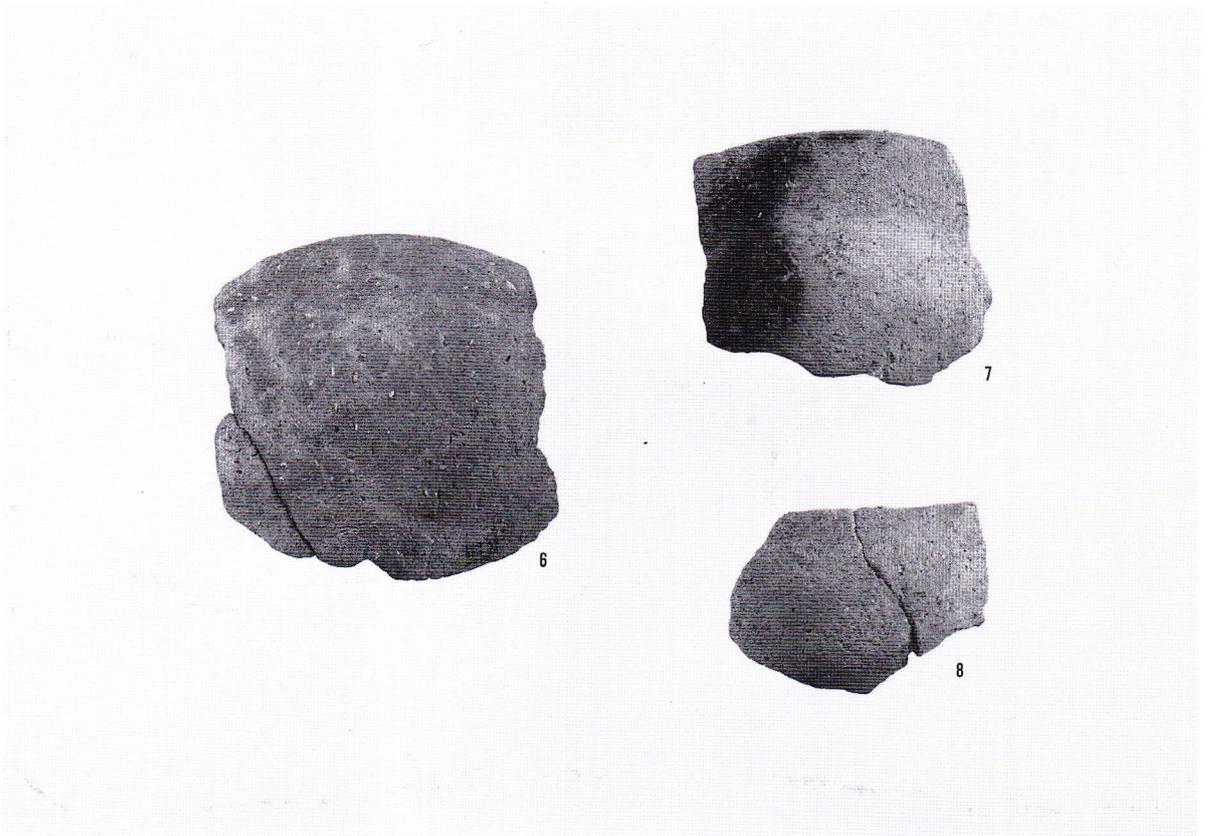
D区 SB-2 (北東から)



D区 SB-5 (北東から)



包含層ほか出土遺物 1～3 弥生土器壺 4・5 弥生土器底部



SD-2出土遺物 6～8 土師器



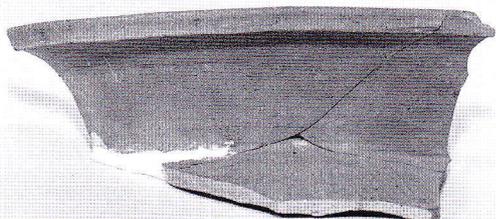
9

SK-2出土遺物 9須恵器高杯蓋



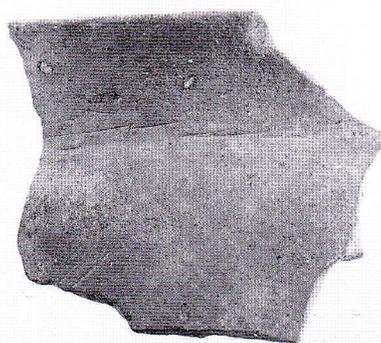
11

SK-2出土遺物 11須恵器杯身



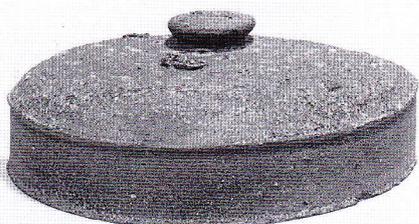
12

SK-2出土遺物 12須恵器甕



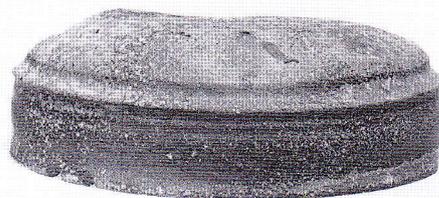
15

SK-2出土遺物 15土師器甕



16

SE-1出土遺物 16須恵器高杯蓋



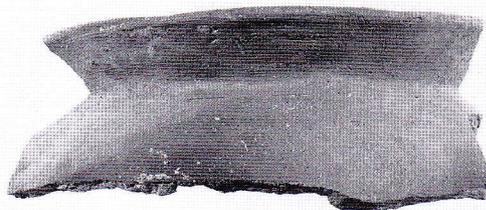
17

SE-1出土遺物 17須恵器高杯蓋



18

SE-1出土遺物 18土師器杯



20

SE-1出土遺物 20土師器甕



21

SD-6出土遺物 21須恵器蓋



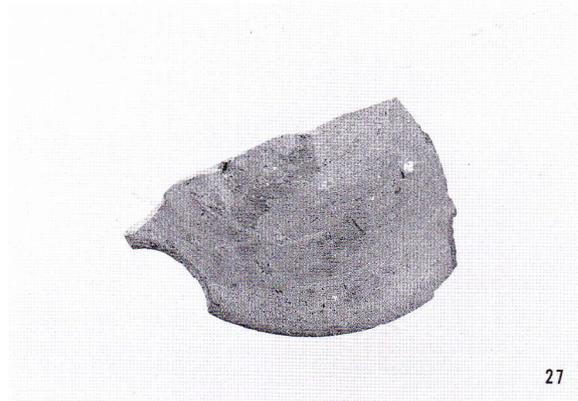
23

SD-6出土遺物 23須恵器杯身



25

SD-6出土遺物 25須恵器杯身



27

SD-6出土遺物 27須恵器蓋



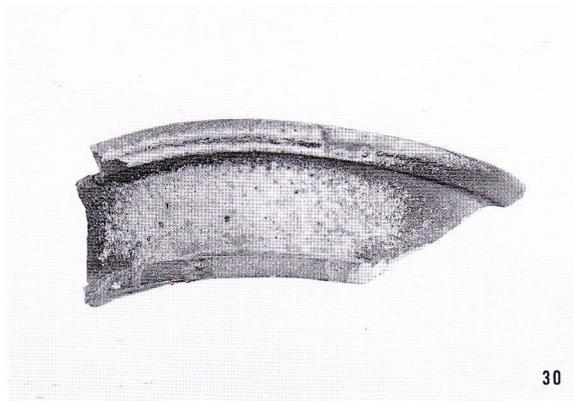
28

SD-6出土遺物 28須恵器甗



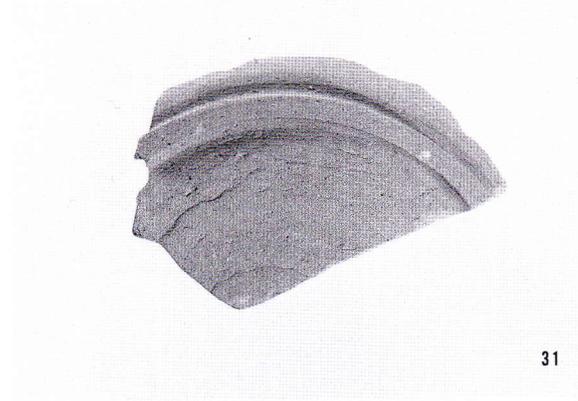
29

SD-6出土遺物 29須恵器甗



30

SD-6出土遺物 30須恵器甗



31

SD-6出土遺物 31須恵器杯身



34

SD-6出土遺物 34土師器高杯



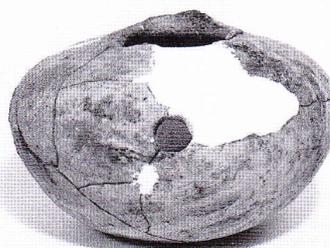
36

SD-6出土遺物 36土師器高杯



38

SD-6出土遺物 38土師器壺



39

SD-6出土遺物 39土師器甕



45

SD-7出土遺物 45須恵器杯身



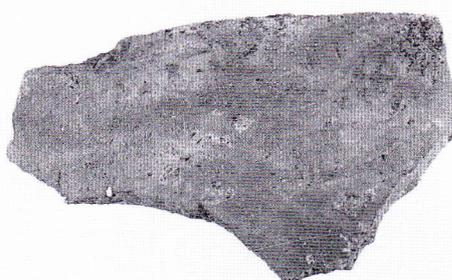
46

SD-7出土遺物 46須恵器杯身



48

SD-7出土遺物 48須恵器壺



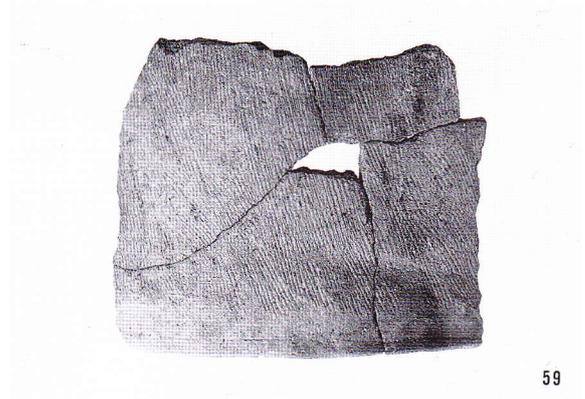
50

SD-7出土遺物 50土師器甕



58

SK-13出土遺物 58土師器高杯



59

SK-13出土遺物 59カマド



60

包含層出土遺物 60須恵器蓋



61

包含層出土遺物 61須恵器杯身



包含層出土遺物 62須恵器杯身



66

包含層出土遺物 66須恵器甕



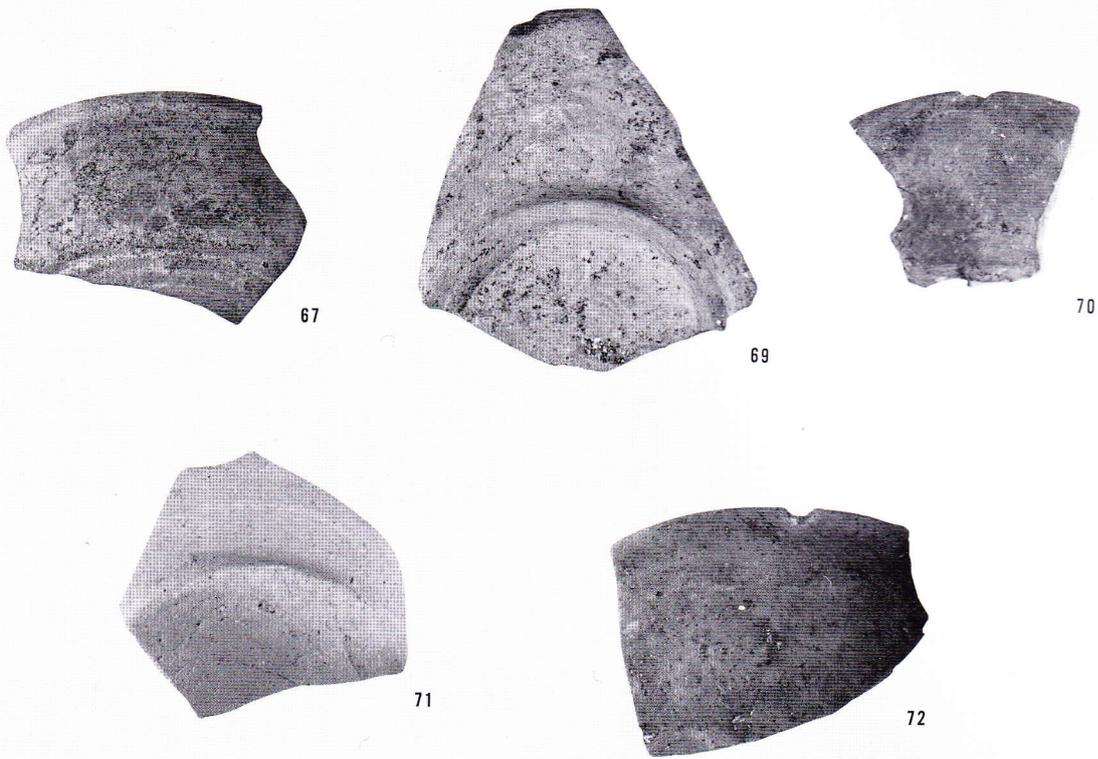
65

包含層出土遺物 65土師器高杯

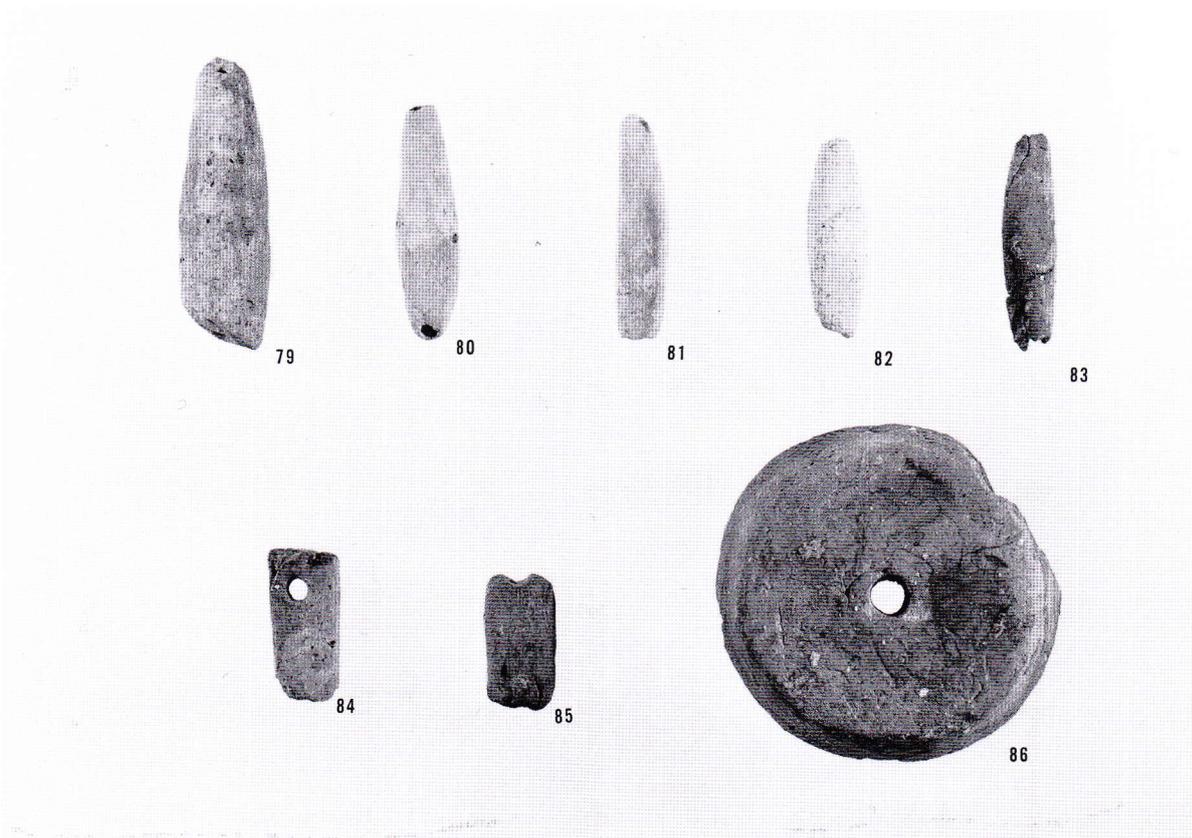


68

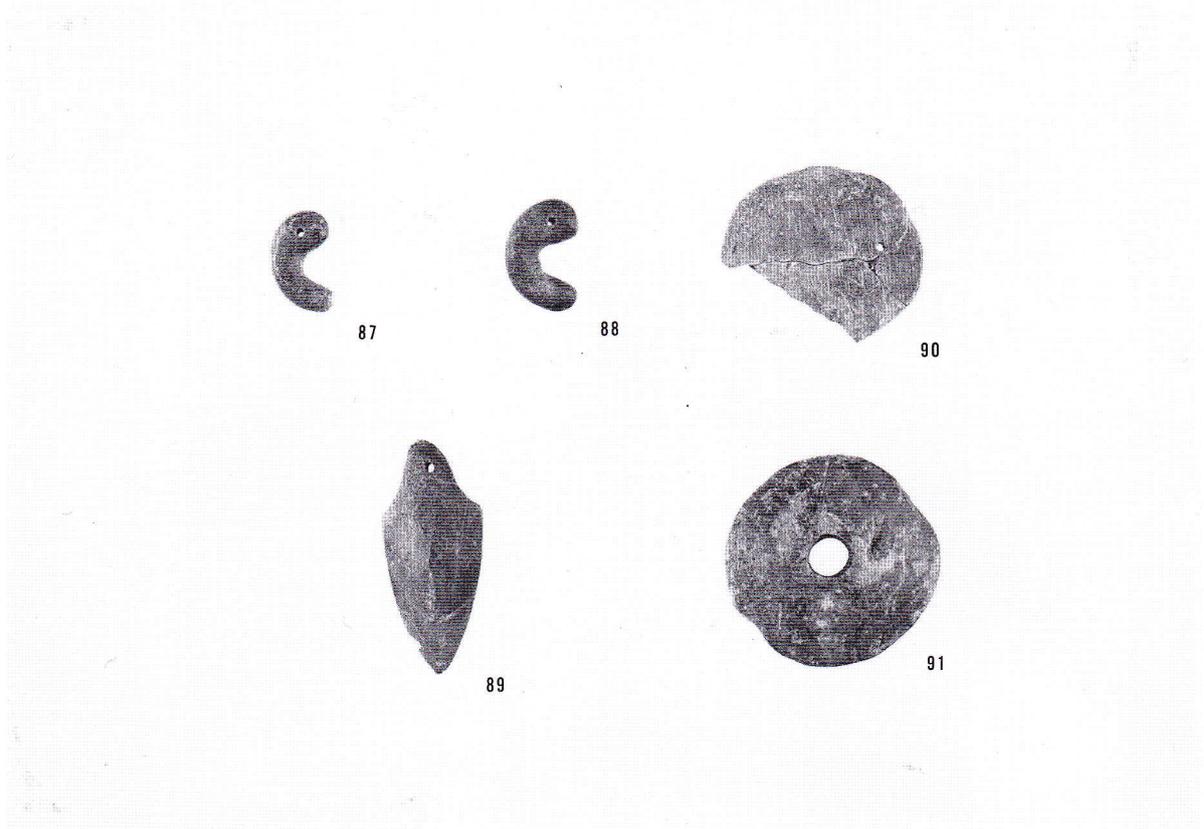
包含層出土遺物 68須恵器壺



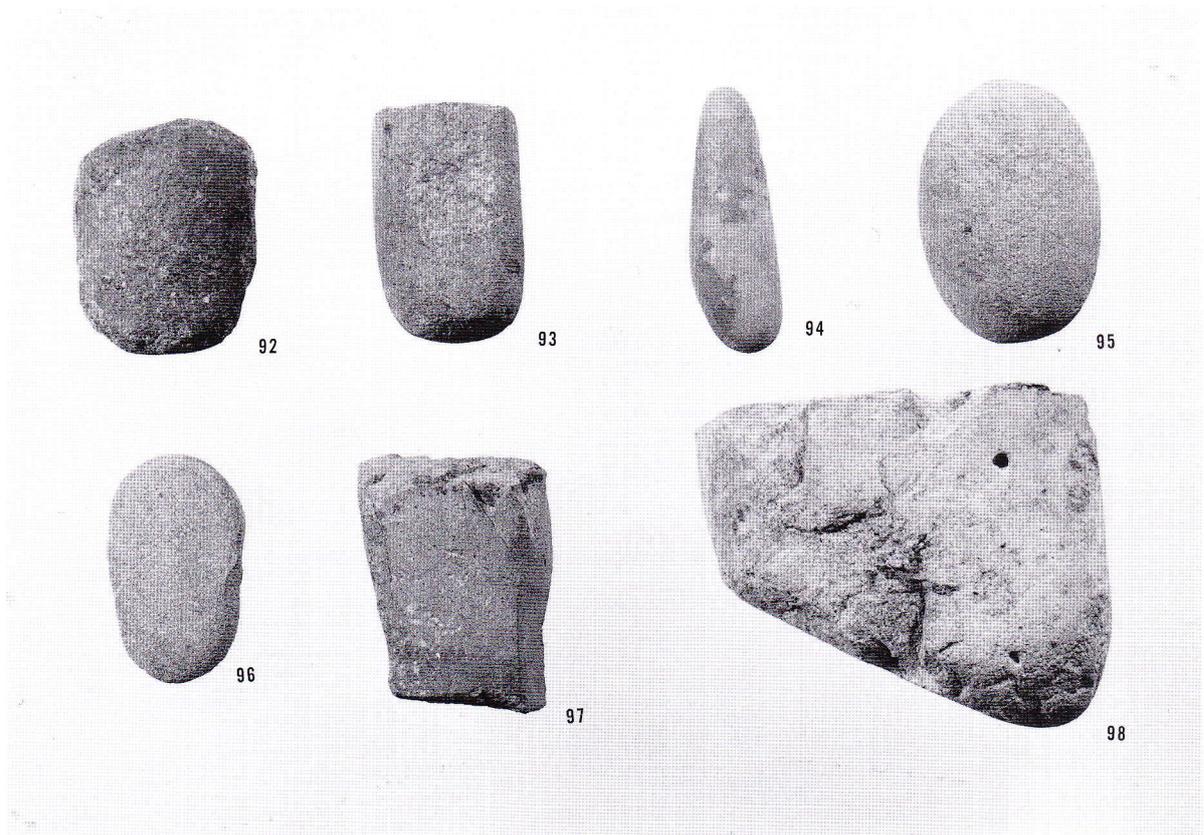
67土師器杯、69黑色土器碗、70土師器皿、71須恵器碗、72瓦器碗



79~85土錘、86不明土製品



87・88勾玉、89剣形模造品、90有孔円板、91紡錘車



92～96叩き石、97・98砥石

平成10年3月31日発行

友田町遺跡第2・3次発掘調査概報

編集・発行 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印刷 西岡総合印刷株式会社

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 1998

